
ドルアーガの冒険

まあしい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ドルアーガの冒険

【Nコード】

N4525Y

【作者名】

まあしい

【あらすじ】

『主人公はゲームプレイ中に寝落ちでゲームに似た異世界へ来てしまう。初めは夢だと思っていたが、いつまでたっても覚めないことなどからこれが小説で読んだ異世界転生だと気づく。他の小説の主人公の様に最強レベルとは違い、ゲーム内で中堅レベルしかない主人公は無事にこの異世界で生き抜けるのか？そして元の世界に戻るのか？』

はじめまして「まあしい」です。この作品は某MMOの世界を舞台にした異世界小説（にする予定）です。初作品なので、深く考えず

にのんびりやりたいと思います。個人的好みにより、某有名ファンタジー小説の登場人物に似た人々もそのうち出たりしますが、スルーしていただければありがたいです。（不快に思うファンの方は読了をお勧めします）

更新は、作者が仕事をしている関係で不定期となりますのでご了承ください。出来るだけ週に2回程度は更新したいと思っています。少しでもお楽しみいただければ幸いです。

1 物語のはじまり（前書き）

初作品です。あたたかい目で見てやってください。 m — — m

1 物語のはじまり

「ふう。仕事の後のビールはうまいなあ」

今の時間は10時半を少し回ったところ。

菓子の卸問屋で営業をする俺はビールを片手にコンビニで買った弁当を食べる。

職場でも中堅となった俺は、得意先まわりはもちろんのこと、後輩の指導や書類整理までこなしておりなかなか忙しい。

やっとお腹を満たし、軽くシャワーを浴びた俺は、PCにむかいゲームを始める。

もう、3年以上続けているネットゲーム THE ONLINE
RPG ドルアーガの塔 the Agis of URUK
だ。

ネットで見た関連アニメに釣られてやった初めてのMMOゲーム。

基本無料ということもあり、やってみると最初の頃はレベルも簡単に上がって楽しめたので嵌ってしまった。

攻略サイトを見ると同じ戦闘職であるスカウトの方が有利だとの説明もあったがソルジャーにした。

理由は、ドルアーガの世界で”ベルセルク”の”ガッツ”をやりたいかったから。まあ、お子様的な発想だ。

ソルジャーはガッツ愛用の両手剣を使えるのとともに、2次職でベルセルクへ転職できる。

それに、よく見ると同じような考えのガッツに似たプレイヤーもいたりしたのだ。

ゲームはレベルアップとともにやれるスキルも増えたり面白くなっていたが、Lv20を越えたあたりから無課金でプレイするのが大変になってきた。

多少の金もあったので課金できないわけではなかったが、どこか意地になって無課金でプレイしていた。

それでも、カンストが多数いる大手ギルドに誘ってもらい、仲間の支援を受けながらやっとクエストをクリアしてベルセルクに転職することができた。

目標のベルセルクとなり、俺としてはそこでやめてもよかったのだが、ギルドの仲間にお世話になった分を少しでも返せればと思い、フレや他のメンバーのクエストをサポートしたりして細々と続けた。

最近の仕事の忙しさから、週末だけどころか1ヶ月以上間をおいたINも珍しくないが、ベルセルクがLv50で装備できる両手剣のためにこつこつソロでプレイしている。

その両手剣とは”クレイモア”。そう、ジャンプ系で連載している”クレイモア”が想像できる大型の両手剣。

あの漫画も好きなのだよ。まあ、ただの自己満足ではあるが小さな目標は大切なのだ。(ちなみに、同じ作者のヤンキーものも好きでした)

そこで、不遇のLv49ベルセルクである俺は、今日も格下のモンスターをストレス解消もかねてこつこつと狩っていたのであったが、安全地帯で回復中に仕事の疲れからか、ゲーム中にいつもの寝落ち状態へと陥るのだった。

『ああ、また寝ちまった』

俺は目をこすりながらPCを見ようとした。

『何だここは…』

俺がいたのは自分の部屋ではなかった。どこかの町の一角で石畳の上に座り込んでいたのだ。

そして、周りにいる人々はどう見ても日本人には見えない人ばかりだ。

西欧風の神官や皮鎧を付けた男女、魔道士のようなローブをまとった人。

座っていたのは広場で、周りをよく見ると建物の形や配置に何となく覚えがある…。

中世の農村がイメージできる、ログハウス調の木造の建築物が立つ町並み。

町の広場の中心部には光り輝く魔方陣で巨大な岩が浮いており、外れには神々しい雰囲気を持った神殿見える。

俺の記憶が確かならば…、ここはラジャフ村なのか。

それはMMORPGドルアーガのプレイヤーにとって“はじまりの村”。

ありえね〜。どうやらここはドルアーガがそれに近い世界らしい。

俺は厨二かつ！

『…そうか。ゲームをしながら寝ちまったからその夢を見てるんだな』

俺は、夢の途中でその世界が夢であることを認識して楽しむということは何度が経験している。

自分のイメージを夢で具現化し、鳥になったように空を飛んで遊覧飛行などをするのは楽しいものだ。

そのため、また夢の世界で遊んでみるかと軽い気持ちになった。

『最近、ログ・ホラとか異世界物の小説をネットでよく読んでいたからこの夢を見たのかなあ』

自分の装備を確かめるとフルプレートアーマーに両手剣を持ってお

り、寝落ちした時の装備を身につけているらしいことが分かる。

『ここから初期状態の装備だと悲しいからなあ。そう言えば、俺はどんな顔なんだ？』

俺の顔は、のっぺりしたやや面長の顔で、眼鏡を掛けている。残念ながら3枚目な顔だ。

近くの水辺に行って自分の顔を見ると、かなりワイルドなイケメン顔があらわれた。

鋭い目にシャープな顔立ち。そして、黒髪のツンツンした頭とくれば。

『おお、ガッツだ。傷がない若い頃のガッツの顔じゃないか』

多分、20台前半と見える顔だ。顔に傷が無いところを見ると、まだ”蝕”には係わっていない頃の顔だな。

渋めのクールな顔だな、いい感じだ。この顔ならリアルでモテナイ俺でもモテソウナキガスル。

でも、この状態で俺は何が出来るんだろう。他の異世界設定ではウインドウが開いたりしたけど…。

・・・開いたよウインドウ。

思考を集中すると視界の上のほうに半透明で表示されるんだ。

さすがに俺の夢だけあるわ、うん。

そこで俺はシステムウィンドウでアイテムと装備を確認する。

中身は赤と黒が印象的なデザインのLv40鎧（強化版）だが、幻想装備であるアニメでウトウが装備している鎧を纏っているため、外観はグレーの無骨なフルプレートメイル（全身鎧）に見える。

アイテムは格下モンスター狩りの途中だったのであまりたいしたものが入っていない。

布系とか糸がメインだ。…しょぼいな。

回復ポーションは多少あるけどNPCでも売ってて特別なヤツじゃないし。

まあ、手元に50銀ぐらいはあるから問題ないな。夢の中だし、実際に減るわけじゃないからな。

ステータスを確認すると、性別も職業も以前と同じだが名前がガッツ変わっていた。

名前は変えられないはずなのにガッツになっちゃってるよ。うれしかかも（^^）

それに、ここがラジャフ村だとすると近場には強いモンスターいないし、戦えば無双状態だ。

様子を見る時は弱いやつからが基本とくれば、バビリム街道に向かえばいいよな。

Lv1のネズミ狩りといきますか。

中央の広場を通り過ぎてバビリム街道へ歩くのだが、思ったよりも距離がある。

ゲームよりも村の建物がかなり増えているようだ。

ゲームで見た建物だけじゃ村の生活が維持できないもんなあ。

その分、村が全体的に広くなってるんだ、よくできてるもんだよなあ。

俺は村の町並みを見ながら街道への入り口にいた衛兵に目礼すると、特に咎められもせずに最弱モンスターのいる街道へ出た。

草原につづく街道を歩いたが、ゲームのようにすぐにはモンスターを見つけれないようだ。

本来だと村にモンスターが近づくことはないのだから本来は容易に出会うものではないのだろう。

それでも、10分ほど街道を歩くと巨大ネズミを発見した。

ゲームで見たおなじみのモンスター スモールラットは体長1.5mほどで、カピバラをさらに二周りぐらい大きくしたような感じだ。

プレイヤーが初めて出会うモンスターの一つだ。

しかし、今の私は初心者のところとは違うのだよ、フフフ。

Lv45両手剣（強化版）を振るかざすと、Lv1スモールラットへ上段から真つすぐに振り下ろした。

ズサッ。ドスッ。

斜め右から切り下ろした剣は、そのパワーとスピードで予想以上に勢いが付き、スモールラットの肉体を両断した後で地面に突き刺さってしまう。

ネズミくんは小さな断末魔と血飛沫をあげながら昇天し、光を残してその身は消えうせた。

モンスターを切った感覚は剣を通して手に残り、一瞬飛び散った血の匂いだけが辺りに漂う。

『本当に夢なのか？匂いがある夢なんて俺は見たこと無いぞ？』

これは、俺が夢を認識する場合、匂いや味が感じられないという経験が何度もあるからだ。

俺は五感が正確に働かないことには敏感らしい。

イメージとしての味や感触を夢の中で認識しても補正が働くらしく、どうしても違和感を感じてしまうことが多いのだ。

もちろん、この感覚には個人差があるかもしれないが…。

その後も何匹かスモールラットや、それより一回り大きいディングイラット、両翼2mはある巨大コウモリのブラックフライを軽く一撃で葬ったのだが、やはり血の匂いがした。

俺はここにいたって、初めてこの世界が夢ではないという不安に取り付かれたのだった。

<補足>

ステータス（補正なし）

名前：ガッツ

称号：なし

性別：男

職業：ベルセルク

戦闘LV：49

HP：620

MP：216

攻撃力：253

防御力：287

1 物語のはじまり（後書き）

誤字、脱字、誤り、勘違い等は適宜修正したいと思います。

2011/12/18 加筆・修正

2012/01/01 加筆・修正

2 ラジャフ村(1)

本当にこれは夢じゃなくて異世界転移なのか？

かんべんしてくれよw

それに、うろつろした人を見なかったところからすると、転移は俺だけっぽいし。

足早にラジャフに戻った俺は、不安になり人気の無い安全な場所で現状確認をはじめた。

装備はイベントリウィンドウで確認できた。同じく持ち物も確認できるが、どこにあるんだろう？

そういえば背負っていた皮製のナップサックのような荷物袋からは殆ど重さを感じないけどもしかして…。

荷物袋に手を入れて体力回復ポーションをイメージすると、手に堅いものが触れる。

取り出すと見覚えのある赤い液体が入った細長い試験管に似た器だった。

体力回復ポーションだ！これはマジックバックなのか！

イベントリウィンドウを確認するとポーションが一つ減っている。

ドラえもんの四次元ポケットみたいだなあ。

しかし、本当に俺の夢で無いならばかなり困ったものだ。

小説や漫画ではよくあるパターンでも、自分に起こればただの悪夢でしかない。

だってそうだろう？

世界一安全で平和な日本からくらべると、剣と魔法の世界は危険が多すぎる。

だから創作世界の主人公たちはかなりチートな設定が認められていた。

その時は神様のな人がチートな望みを聞いてくれたようだったが俺には無いのだろうか？

………無いらしい。

目覚めてから体感で2〜3時間は経過しているはずだ。

これだけ時間が過ぎても反応がないんじゃないじゃそのパターンは無しか。

辺りを見ると空が薄暗くなり、夕闇が迫ってきているのがわかる。

野宿はごめんなので宿を探すことにする。

そういえば、ラジャフには宿屋が1軒あったと思うが？

中央の広場から東側に伸びる放射状の道を歩くと、職人たちがにぎわう通りで30歳ぐらいに見えたとばけた顔の男が呼び込みをしていた。

「おいしい食事と安らかな睡眠を約束する夢屋の宿だよ！ラジャフ1番の宿はいかが〜！」

あれは宿屋の若旦那、アドナーンか？

クエストに関係していたNPCだが、もし依頼があっても今はスルーして泊まろう。

「宿に泊まりたいんだが？個室で1泊いくらだ？」

「1泊なら20銅、朝と夜の食事付なら26銅だ」

1銅が100円〜200円というところか？

懐はまだ暖かいのでその程度なら問題ない。

「食事付で頼む」

「よしきた！お一人様ご案内！個室で食事付だよ〜！」

大きなログハウス風の宿に入る、外観もそうだが思っていたよりもかなり広いようだ。

「いらつしゃい！若女将のアイリーンと申します。部屋は2階の奥の1番になります。食事はすぐにめし上がりますか？」

20代前半と見えるかわいらしい顔の女性が迎えてくれた。

やるなアドナーン、うらやましいぞ。

「ガッツだ。部屋に荷物を置いたら食事を取りたい。とりあえず2泊はするつもりだ」

「ありがとうございますガッツさま。2泊だとサービスさせていただいて50銅になります。階段の横におけと水がありますのでお使いください。」

金を払って鍵を預かると、俺は水をはった木のおけを持って部屋に向かった。

部屋の鍵を開けて中に入ると縦長の6畳ほどの広さだった。

右側にベットがあり、左側にはちいさなテーブルと木の椅子がある。

先ほど使った部屋の鍵は簡易なものようだったので貴重品は部屋に置きそうもない。

まあ、マジックバックがあるからその必要はないが。

バッグからコットンの布を出すと、俺はたらいで顔や手足を洗い、布でふきあげてさっぱりする。

食事をするのに全身鎧はつらいので、バッグの皮鎧に着替えると、念のため片手剣を腰に差した俺はバッグを背に1階の食堂へ降りていく。

空いているカウンター席に腰を下ろすと若女将のアイリーンが注文を取りに来た。

「今日のメニューは、イートラットの煮込みかベジタブルバットの姿焼きになりますがどちらにしますか？」

「……俺にネズミかコウモリか、どちらかを選べというのか。

やっぱり悪夢じゃないのかこれ？

イートとかベジタブルとか、記憶しているモンスターの名前とは違う呼び名をしているから食用のようだが、所詮はネズミとコウモリだろう。

基本的に好き嫌いが無い俺だが、ゲテモノ系は別である。

しかし、俺の記憶ならばカピバラは南米の一部の地域で食用にされているはずだし、コウモリも東南アジアでは食用のものがあつたようだ。

俺は勇気を出して聞いてみた。

「今日のおすすめはどっちだ？」

「やっぱり、イートラットの煮込みですかね？しっかり煮込んであるのでおすすめですよ」

「それでは煮込みをたのむ」

「わかりました。ラット煮込み1人前入りまゝす！」

食堂で聞き耳を立てながら時間をつぶしていると、10分ぐらいたってから木の器に入った煮込みと木の皿にのった黒パンが運ばれてきた。

「おまちどうさま。イートラットの煮込みです。熱いので気をつけてお召し上がりください」

あまりおまちしていないかもしれないが、見た目はポトフのような感じで悪くない。

お腹もすいてきたような気がするので、とりあえずスープを木のスプーンで飲んでみる。

塩が少し薄味だがおいしく感じる。

ニンジンや玉ねぎのような野菜が入っており、うまみも感じるしコクもあるようだ。

次に、思い切ってイートラットの肉を食べると豚肉のような味がする。

かみ締めるとさらに肉の味が口に広がり、しっかりとした歯ごたえが伝わってくる。

十分満足できる味だったので、黒パンと一緒にあっという間に完食した。

食わず嫌いは良くないな、今回はコウモリさんにチャレンジしてみるか？

食堂を後にした俺は、カウンターでランプを借りると部屋へ戻った。テーブルにランプを置くと、荷物を窓際に下ろしベッドへ横になる。ベッドはわらの上に毛布を敷いたもので、寝るときにはさらに毛布をかけるようだ。

わらの匂いは、子供の頃に農家の友人のところで遊んだ頃を思い出させる。

ハイジもこんなベッドに寝ていたのかなあ。

慣れない狩りと異世界の雰囲気には疲れた俺はランプの火を消してねることにした。

詳しい情報収集は明日からにしよう。

俺はまぶたを閉じて、元の世界の戻れることを念じながら眠りについた。

2 ラジャフ村(1)(後書き)

誤字、脱字、誤り、勘違い等は適宜修正したいと思います。

3 ラジャフ村(2)

目覚めると、俺はわらのベッドに寝ていた。

やっぱり夢じゃなかったらしい。

軽い焦燥感を感じながらベッドで今後のことを考える。

昨日の狩りでわかったのだが、モンスターを倒して手に入るアイテムは自動的にマジックバックに入りイベントリで確認できるようだ。宿代を稼ぐだけなら、この辺のモンスターを狩ったり、簡単なクエストを受けるだけで足りるだろう。

弱いモンスター相手なら剣の耐久もそう簡単には落ちないから、道具屋へメンテナンスに出す費用も頻繁ではない。

しかし、元の世界へ戻るまでにどれぐらいの期間を過ごすことになるのかも見当がつかないので無駄遣いは出来ない。

そこまで考え、お腹がすいてきた俺は、朝食を食べるために食堂へ向うことにした。

「ずいぶんゆっくりしたようですねダンナ。よく寝られましたか？」

若旦那のアドナーンが声をかけてきた。

「疲れていたのかよく寝たようだ。そんなに長く寝ていたか？」

「日も昇ってけっこうたちますから、他の方は殆ど食事が終わっていますよ」

田舎の1日は、朝日とともに始まるようだ。

田舎に住む農家のじいちゃんも朝の五時ぐらいから畑に行っていたような気がするしな。

朝食は大きな黒パンとハムのような物にサラダとミルクがついている。

食事をしながら俺は時間について考える。

時計もないし、どうやって時間を確認すればいいのだろうか？

そこで俺は地図のウィンドウの中に時計があったことを思い出した。

地図ウィンドウをイメージすると右上に確認することができ、さらにウィンドウの右上にデジタルで時計が表示されていた。

ゲームでは1分が1秒ぐらいの速さで経過していたが、この世界ではそうではないようだ。

食事を終えて部屋に戻った俺は、念のためフル装備で情報収集のため外へ行くことにした。

宿がある通りは中央の広場から倉庫へ伸びているのだが、ゲームではここに生産用のNPCが並んでいた。

倉庫はアイテムを預けておけるとところで、預けたアイテムは各タウ
ンの倉庫で受け取ることができる。

アイテムの出し入れは倉庫番のNPCに話しかけて行っていたが、
この世界ではどうなるのだろうか？

俺は倉庫番の女性、タリアに話しかけた。

「アイテムを取り出したいんだが」

「ステータスカードをお見せください」

ステータスカード？何だそれは？

ゲームの世界では無かったものだったので少し困惑する。

そう言えば他の異世界でもそんなシステムがあったしな。

もしあるとすれば…、それはイベントリウインドウの中にいつの間
にか入っていた。

俺はバッグにステータスカードをイメージして手をいれ、金属製の
カードを取り出してタリアに渡した。

「ガッツさま、何を取り出しますか？」

「強化体力回復剤を50個取り出したい」

「かしこまりました。ガッツさま、カードに手を当ててください」

そう言うと、タリアはステータスカードに手を当てながら目を閉じた。

俺がカードに触れると、次の瞬間、イベントリウインドウの中に強化体力回復剤が50個表示される。

「アイテムをご確認ください」

「ああ、確かに受け取った」

ステータスカードを返された俺は、念のため倉庫のシステムを確認した。

「最近はずちを離れていたんで聴いておきたいんだが、アイテムの取り出しはいつでもできるのか？」

「はい、いつでも倉庫番が常駐していますから大丈夫ですよ」

「料金は？」ゲームでは無料だったので確認してみる。

「月に100銅いただきます。通常はお預かりしているところから月末に自動的に引き落とします。もしも、引き落としが出来ない場合は、一定期間アイテムを保管後、任意で換金していきますので注意してください。」

そうか、現実問題として貸し金庫のようなシステムになっているのだろう。

「わかった。ありがとう」

「またのご利用をお待ちしております」

倉庫を後にすると、俺は広場の方へ向かった。

ゲームで並んでいた生産用のNPCは露店のような形態だったが、ここではちゃんと建物の中で職人が作業しているようだ。

生産スキルをもっているプレイヤーは、そこで生産レベルで可能なアイテムを作成できたのだが、ここでもできるのだろうか？

俺は刀工のスキルだから刀鍛冶のNPCだったマセンに聴いてみよう。

「すまんが、刀を生産したいときはどうすればいい？」

「材料さえ持ってくれば作業場を貸すぜ。まあ、普通は50〜100銅ってとこだな」

「そうか、今日はやらないがその時はたのむぜ」

「ああ、よろしくな」

そのうちに材料をそろえて簡単なものを生産してみたい。

まあ、生産レベルはあんまり上げていないからそれしか出来ないんだけどね。

俺からすると生産レベル上げるのはマゾに近いと思う。

刀は作ってもあまり売れないから、骨をすりつぶして骨粉にしてか

ら研磨材を作ったりするんだけど、研磨材が高く売れないから材料として買い取ってもらうより赤字になるし、やりきれなくなっちまうんだよね。

学術スキルなら将来は回復剤やらで儲けられるからがまんできるんだろうけどなあ。

そんなことを考えながらアイテムショップで賑わう広場へ向かう。

広場の中央にはルーンを纏った巨大な岩が20mほどだろうか、高く空中に浮いている。

神の力とかで浮いているって書いてあったような気がするが。

俺は、その神秘的な光景を見上げて目を奪われながら思うのだ。

俺はラジャフに駐屯するバビリム国の衛兵ラクターだ。

このラジャフは、古くは大陸全域から巡礼者が集まる一大聖地であったが、今は首都バビリムの建都によって以前よりも静かな雰囲気を保っている。

もちろん、イシター神殿の出張所がある為、今もここを訪れる敬虔な信徒は多いので賑わいが無いわけではない。

俺はこのラジャフを守る衛兵の長として中央の広場で警備をそてい

る。

このには巨大なオーブが神々の力で中に浮かんでいるのだ。

数年前まではこの村も、南に広がる死の砂漠に飲み込まれるところだったんだが、このオーブの力で緑を回復することができたんだ。

その平和なラジャフに昨日から変わった雰囲気の方が現れた。

戦士職らしい冒険者に見えるが、その雰囲気と見たことが無い大型の業物らしい両手剣からして、かなりの手練れできるヤツのようだ。

その割にはラジャフになれていないのか、キョロキョロしていたのが気にかかっていた。

調べてみるとガッツという名前で昨日は夢屋に泊まったらしいが、何の目的でこのラジャフに来たのだろう？

このあたりのモンスターでは実力がとても合わないようにしか見えないが？

『ん、こっちに来るのは例の男だ。声をかけてみるか』

3 ラジャフ村(2)(後書き)

誤字、脱字、誤り、勘違い等は適宜修正したいと思います。

4 ラジャフ村(3)

広場に近づくと衛兵のラクターがこちらを窺っているようだ。

衛兵はともかく、なぜ名前まで分かるのかと言うと、ゲームと同じようにターゲットすれば職種、名前が確認できるうえ、プレーヤー以外のLvまで分かるようになっていいるからだ。

これは実戦でかなり有効な能力になる。

万が一、見たことが無いモンスターに出会っても、Lvの違いで回避することが可能になるのだ。

特にボスキャラであるパワードモンスターに遭遇する時は、ある一定以上のLvのPTで挑まないと苦戦することも多いからな。

衛兵のラクターはLvを確認すると25のようだ。

ラジャフ街道側のモンスターは雑魚だし、黒のオベリスクだつて入口周辺のモンスターなら十分撃退できるLvだからこのLvで問題ないんだな。

おお、ゲームなら動かないラクターがこっちに向かってきたぞ。

「おい、その冒険者。見ない顔だが名前は何と言う」

「ガッツだが、あんたは？」

「衛兵のラクターだ。かなり使えるようだがラジャフへは何をしに来た？」

おいおい、いきなり職質だよ。リアルだつてされたことないのに。

まあ、見た目がガッツだから仕方ないのかもしれないけど、嘘と本当をうまく混ぜて話すか。

「実は困っている。転移魔法でここまで飛ばされたらしいが、何らかのアクシデントで自分の記憶に曖昧なところがあるんだ。このまちなラジャフだという記憶があるのだが、自分の記憶と微妙に違う様な気がするのでうつろについていたんだがな……」

「そうだったのか？場違いなヤツがいると思っていたんだが転移か……。高度な魔術だがアイテムとして出回っているとは聞いたことがある」

かなり怪しい返答だったがそれほど不審に思われなかったらしい。

「まあ、これも一時的なもので、そのうち記憶も戻ってくるんじゃないかと思ってる。しばらく滞在するつもりだからよろしくな」

「ああ、面倒を起こさないならば実力のある冒険者は歓迎だ。もし時間があれば依頼でも受けてくれ」

「どんな依頼だ？」

面倒なことならごめんだぞ？

「そこに娘がいるんだが、村長の娘でルエリアという。モンスター

絡みで冒険者頼みたいことがあるといていた。一度話を聞いてやってみてもらえないか？」

おお、初クエストかな？ラクター経由で来るとは考えていなかったけどね。

「いいだろう。ただし、受けるのは村の様子を一通り見てからになるぜ？」

「問題ない。たのんだぞ」

つい依頼の話を聞くことにしたが、これには理由がある。

記憶では、そのクエストはかなり初期のLvが低いクエストだったはずだ。

それに、おそらく衛兵の紹介で村長の娘の依頼を受ければ、ラジャフで信用が付くはずだというもくろみもある。

田舎つてのは流れ者には敏感なものだし、お偉いさんの影響つてものは良くも悪くも大きいのだ。

俺は広場の中にいる村長の娘、ルエリアのところへ行つて話を聞くことにした。

そうやって会いに行ったルエリアは、グラフィックで見た素朴な顔ではなく、見た目は高校生ぐらいの少しきつめの美人さんだった。

「ラクターに紹介された冒険者のガッツだ。モンスター絡みで依頼があると聞いたんだが？」

「村長の娘のルエリアよ。実は最近、村の周りのモンスターが増えてきて物騒になって困っているの」

「村のすぐ近くにはモンスターがそれほどいないようだが？」

「村はオーブの加護があるためか問題ないわ。この村はバビリムとの交易で成り立っているんだけど、最近『塔』の周りに魔物が徘徊するようになって、商人たちが襲われる事件が多発しているのよ」

ドルアーガの塔の影響でモンスターがやはり活性化しているらしいな。

「ついこの間も魔物に隊商の積荷が襲われて荷が奪われてしまったんだけど、それを探してきてくれないかしら。勿論、報酬は用意するわ。荷物10箱につき100銅よ。どうかしら、やってくれる？」

ほう、実際に狩りをする手間がかかることが分かったが、報酬にも上昇ということで反映されているようだ。

「問題ない。ただし、ここは来たばかりなので一通りアイテムショップを覗いて準備してになる。明日からでもいいか？」

「いいわよ。そう言えば、商隊を襲ったのはスモールウイングらしいから、あいつらを中心に倒してみて」

「分かった。荷物はどこに届ければいい？」

「私はこの広場にいることが多いけど、いない時には西側に村長の家があるからそこへ届けてくれるかしら？」

「おう、村長の家だな」

こうして俺はこの世界で初めての依頼「クエストを受けることになった」。

しかし、初期のクエストだから記憶に残ってなかったけど、ルエリアってこんなキャラだったんだ。

初めてのクエストに少しだけ気分が上がった俺は武器の手入れが出来るところを探すことにした。

戦士としては武器の切れ味は死活問題だから大切なのだ。

剣が看板にかいてある武器商人の店へ行ってみることにした。

店に入ると剣の他にも、メイスや魔法の杖まで扱っている。

ただし、担当がいるらしくソルジャーやスカウトの前衛戦士系、ドルイドやメイジの後衛魔術系と者達と商談をしていた。

俺は剣を扱っているカウンターへ向かった。

「いらっしやい。お客さん、どんな種類の武器をお探ですか?」

「そのうちに剣を砥ぎに出すつもりなんだが、ここで頼めるか?」

「大丈夫ですよ。それに、このラジャフならほとんどのアイテムシヨップで受付できますよ。実際に剣を研ぐのはマセン親方のところですからね」

「その親方なら少し前に会ったぜ」

「そうですか。村の約束事ですから法外な値段を取られることもありませんし、安心して依頼してください」

「分かった」

ゲームをしている時は雑貨商店で修理できることが不思議だったけど、そういう便利なシステムなんだ。

それとは別に俺は剣を物色することにした。

今持っている剣は、最低でもLv30以上の武器であるためラジャフ周辺で使うには威力が大きすぎるのだ。

Lvの高い剣で低Lvのモンスターを狩っても切れ味は落ちないし、それを周りに不審がられても困るという配慮もある。

並んでいる中でも上等な剣を手に取り、装備でどの程度のものか確認したうえで聞いてみる。

「この両手剣はどんな代物だ？」

「この店で一番の両手剣、ブラックフルクスです。黒い刀身は高温で焼かれておりますので通常の鉄製の剣よりも丈夫ですよ」

Lv20以上が装備できる両手剣で、このあたりの雑魚を片付けるには十分な剣だ。

「中々の剣だな、いくらになる？」

「4銀になります」

記憶している店頭価格と同じようだ。

「そうか、この剣を1本貰おう」

「ありがとうございます。最初のメンテナンスは無料でやらせていただきますのでお持ちください」

「それは助かるな。その時は頼むよ」

そう言っただけで俺はバッグから4銀を払って武器を受け取ると店を後にした。

4 ラジャフ村(3)(後書き)

誤字、脱字、誤り、勘違い等は適宜修正したいと思います。

5 はじめてのクエスト

剣を購入した後は防具の店にも寄ってアイテムを確認したがLv20が上限のようだった。

俺の装備はLv40なのでLv20の低い装備をする必要が無い。

現時点では幻の装備をその上に纏っているので疑われる心配も少ないと考え防具の購入は見送ることにした。

雑貨商も見えて回ったがアクセサリなどの装備品の他にも干し肉などの保存食品を手に入れられるようだ。

俺は一度宿に帰って夕食を取りながら依頼について考えることにした。

夕食のメニューはイートラットの串焼きを選ぶことにした。

甘辛いスパイシーな味で、漬け込んでから焼いているらしく味もよくついていて美味しいと感じた。

肉料理は果物が入った調味料に漬け込むことでやわらかくなるといふからその効果もあるらしい。

食事を終えたところで、アドナーンにラジャフ街道のことを聞いてみる。

「ラジャフ街道で商隊が襲われると聞いたが、どのあたりで襲われ

るんだ？」

「そうですね。歩いて3時間ほど行った所に川がありますが、そこを渡った草原のあたりでモンスターがよく出ると聞きますが。」

3時間だと？あそこならゲームでは走って2、3分で着いたところだったのに、かなり距離感が違ってきているらしいな。

「かなりやられているのか？」

「どの商隊も襲われるわけではないですが、比較的小さな商隊が襲われやすいですね」

「何か理由があるのか？」

「冒険者の護衛を雇っている大きな商隊ならモンスターが襲って来ても撃退できますが、小さい商隊は逃げるのが精一杯ですから狙われやすいでしょう」

あのあたりのモンスターは強くないので撃退することは難しくないはずだが、戦闘力の少ない商人には手ごわい相手ということか。

「明日はそのモンスターを討伐するために早めに発つつもりなんですが、昼間に腹に入れる軽い食い物を用意してもらえねえか」

「あのモンスターを討伐していただけたとはありがたい。いつまでもうろつろされてはこっちの商売にも差し障りがですからねえ。アイリーンに何かいいものを用意させますよ。お代は結構ですから」

「悪いな。まあ、期待にそえるよう頑張ってみるか」

「頼みますよ旦那」

初期イベントでこんなに期待されるとは意外だ。

割のいい仕事ではないので通常の冒険者には敬遠されるのかもしれないな。

俺は部屋に戻って早めの起床に備え、さっそく寝ることにした。

早く寝た甲斐があつてか薄暗いうちに目が覚める。4時を少し過ぎたぐらいだ。

木の桶に汲んであつた水で顔を洗うと食堂へ向かった。

出された朝食には昨日と同じ黒パンに目玉焼きがついている。

サラダとミルクも同じようにある。

玉子好きな俺としてはうれしかったりする。

まあ、何の玉子かは聞かないでおくが…。

「旦那、こちらが昼用の食事です。野鳥の燻製をパンに挟んであります」

ナイスだ、アイリーンの料理はうまいから期待できる。

「ありがたい。戻ったらまた泊まらせてもらっからよろしくな」

「こちらこそありがとうございます。無事にお戻りになるようことを祈っております」

こうして俺は5時ぐらいに朝日が昇ったばかりのラジャフを出た。

普通に歩いたら3時間かかるらしいが、こちらには移動が早くなるスキル“フェザームーブ？”がある。

パッシブスキルなので常時スキルが働くため、改めて発生させる必要も無い。

駆け足してみるとスキルがはたらき、かなり強い追い風に押されて走る状態になる。

鎧をフル装備しているのにその重さを感じさせないところが、まさに“フェザー”だ。

フェザームーブ？は全速力で常時移動するのと同じぐらいの効果になるイメージだ。

さすがLv補正の付いたガッツの体力は尋常でないらしく、全速力を続けるといつの間にか草原を越え、川に架かった木の橋を渡って1時間半ほどで目的地に到着した。

道もあまりよくないし、アップダウンもあったからこんなもんか。

疲れも無いようなので、俺はクエストの獲物であるLv3スモールウイングを探すことにする。

草原を見渡して探す、そう簡単に獲物のモンスターは見つからないらしい。

代わりにクモ型モンスターのLv2スモールスパイダーやLv3ウエブメーカー、ネズミ型Lv2ラジャフラットを倒してみる。

倒すだけなら一太刀で十分なのだが、練習として上段からの2連撃を試してみる。

右上段打ち下ろしの太刀筋から力を出来るだけ殺さず、手首を返し円運動でもう一度振り上げて切り落とす攻撃だ。

ゲームでは一定レベル以上で自動発生していた通常攻撃なので難しくは無いと思う。

そのうちにスモールウイングも現れたので狩ってみるが意外と手間取った。

コウモリ系はゲームで必ず低空にいたため簡単に狩れたが、ここでは剣の届かない高さへ逃げられるとどうしようもない。

このため攻撃前にヘイトスキルのプロボークで注意を引いて攻撃することにする。

コウモリ狩りを続けると2匹に1匹は隊商の積荷を落とすようだ。

練習していた2連撃も始めは太刀筋が不安定だったものの、だんだんと安定してくる。

それでもクモ達はリアルに狩ると体液が出るし、ネズミやコウモリも血しぶきが出るので死体は消えるがちよつと引く。

ボコボコ現れるわけではないので狩りのスピードはあまり上がらなかったが、昼近くで隊商の積荷も依頼の目安となるを10個集めることができた。

午後も練習がてら狩りを続けるため、この辺で黒パンで野鳥の燻製を挟んだ物を食べることにする。

近世まで平民は一日2食だったらしいけど、これだけ動けば腹が減るしなあ。昼食分頼んで正解だな。

野鳥の燻製サンドは、少し癖のあるターキーサンドのようではななかいける味だった。

腹ごなしに俺は剣で2連撃の太刀筋をイメージでなぞってみる。

実践で練習している甲斐もあつて太刀筋が安定してきたいるが、後には実際にモンスターと戦って錬度を上げていくしかない。

午後もスモールバットを中心に狩りをしたが、ラジャフのクエストではLv3ウェブメーカーを狩るクエストがあったような気がする。

依頼主は誰だったかな？ラクターにでも聞いてみるか。

俺は最終的に22個の隊商の積荷とドロップアイテムを手に入れ、再びラジャフまでマラソンすることにした。

5 はじめてのクエスト（後書き）

誤字、脱字、誤り、勘違い等は適宜修正したいと思います。

6 繋がる依頼

日の暮れ始めた街道をマラソンしてラジャフに着くと、とりあえず村長の家を目指す。

コンコン「冒険者のガッツだがルエリアの依頼の品を届けに来た。ルエリアはいるかい？」

「あら早いね。もう10箱回収したのかしら」

「ああ、22箱回収出来たので受け取ってくれ」

「な、なんですって、22箱も！5人のフルパーティーで行っても15箱ぐらいなのよ！ありえないわ」

「そうは言っても回収したもんはしかたねえだろ？ステイタスカードで品物をトレードするからこのカードを触ってくれ」

ルエリアが俺のステータスカードを触った状態でウィンドウのトレードを実行すると、彼女にも22個の隊商の積荷が確認できたようだ。

「本当にあるのね。剣士じゃ簡単に飛行系のモンスターを難しいはずよ。あなたどういう腕してるのよ」

「まあ、そこいらのヤツには負けねえ程度ってとこかな？」

少しニヤニヤしながら答える。レベルとか言えないしね。

「なんか誤魔化されてる気がするけど、まあいいわ。報酬の220銅よ、受け取ってちょうだい」

ステイタスカードを触った状態でお互いがトレードするものを確認し、了承するとトレードが成立する。

こちらのイベントリからは隊商の積荷が消えて220銅が増えることになった。

「これだけ回収できれば助かるわ。かなりのモンスターも討伐できたんでしょ？」

「ああ、それなりには狩ったはずだ。あの辺の通行が多少は楽になるといいがな」

「そう…。あなたこの村で雇われる気はない？」

ルエリアは意外な話を向けてきた。

「あなたほどの腕を持った冒険者はなかなか居ないのよ。報酬はお父様と相談して考えるけど、どうかしら？」

「悪いがここに長居するつもりは無いんだ。今は事情があつてすぐに戻れないが、自分の国に帰らなくちゃならん。悪く思うなよ」

「残念ね。でも、もしかしたら気が変わるってこともあるからあきらめないわよ」

ルエリアの顔が少し赤いんですけど何かフラグたった？そんな展開

知らないポ…。

「また回収出来たら届けてちょうだい。他にも頼みたいことがあるかもしれないわ、どこへ行けば会えるの？」

「い、今は夢屋に泊まっているが…」

何だか押され意味だ。

「分かったわ。またねガッツ」

「ああ、またナルエリア。」

こうして何か熱い視線を背中に感じてそそくさと村長の家を後にしたのだった。

リアルではありえない美少女からのアプローチに、こっちが赤くなっていなかったか不安であったりする。

隊商の積荷回収はただのクエストのはずなのに、予想外ですこの展開は…。これがツンデレか？

やっぱり似ているけども違う世界ってことだな。パラレルワールドだっけ？

そう考えながら広場を歩いていると、あることを思い出した。

ウェブメーカーのクエストが誰か確認するんだった。ラクターを探そう。

いつもの広場を探したが残念ながらラクターはいないようだ。 24
時間警備できないモンねやっぱ。

よく見渡すと、衛兵が建物に入っていくのが見えた。衛兵の詰め所
のようだが行ってみるか。

「ラクターはいるか？」

そこには兜を外したラクターが椅子に座っている。

「おおガッツか。依頼は受けてくれたらしな」

「ああ、さっきルエリアに回収した積荷を届けたところだ。ところ
で一つ聞きたいことがあるんだが、いいか？」

「何だ、俺に分かることなら教えてやるぞ」

「クモ型モンスターのウェブメーカー関連で依頼があると聞いた気が
するんだが知ってるか？」

「うーん、それならばイシターの巫女見習いのルウアじゃないか？
クモの糸が欲しいと聞いた気がするが……。今ならイシター神殿に
いると思うぞ」

いつも広場で武器屋のそばにずっと立っていたNPCの巫女見習い
か。まだ広場に居れば楽だったんだけどな。

「そうか、それならばイシター神殿に行ってみよう。助かったぜ」

「こっちも依頼を受けてもらったしお互い様だ。もし都合が合えば依頼を頼むことがあるかもしれんしな」

こうしてクエストの依頼主を確認した俺はイシター神殿へ向かった。

村の西端に位置するイシター神殿は歴史を感じさせる白く大きな建物だ。

ギリシャ神殿を連想させるその外観は、神への信仰の強さを感じさせる独特の雰囲気を持っている。

柱の意匠などは旅行で行った時に見たパルテノン神殿に似ているようだ。

神殿の中に入ろうかと思ったが、大きな扉の前に神官が一人いたので巫女見習いについて聞いてみる。

「俺はガッツという冒険者だが、ここに巫女見習いのルウアが居るか？集めている素材を持ってきたんだが」

「そうですか。ルウアなら神殿の奥で祈りを奉げているはずですよ。呼んで参りましょう」

「ありがたい。この辺で待たせてもらう」

神官は軽く肯くと、そのまま神殿へ入っていった。

MMOの時は神殿内に入ることはできなかったので興味があったのだが、なぜか入りにくい雰囲気を感じてしまう。

もしかすると、ガッツの意識が少し影響しているのかもしれない。

ガッツはあれほど神秘的な体験をしているのに神様を信じていないようだった。

その代わりに悪魔や妖精は身近にいたので受け入れているようだったが…。

また、いくら外観がワイルドなガッツになったからといって、普段なら自分はこれほどラフな言葉は使うのは難しい。

演技が入っているとはいえ、それがスラスラと口に出るあたり意識下で影響を受けているのではないかと多少違和感があったりする。

そんなことを考えながら待っていると、先ほどの神官がルウアらしき巫女を連れて来るのが見えた。

6 繋がる依頼（後書き）

誤字、脱字、誤り、勘違い等は適宜修正したいと思います。

7 イシターの巫女見習い（1）

神官がイシター神殿の奥から連れてきた巫女は、ルエリアと同じぐらいの年の少女だ。

白地の上着とロングスカートに青と金色の模様が袖や裾に入っていて巫女らしい神秘的な印象を与える。

そして、その顔はとてもかわいらしく癒し系で、スタイルはボンキュッボンという感じ。

MMOではどちらか言うときりつとした美少女タイプのNPCだったのだが、こっちの方が断然いい！

正直言って超好みのタイプである。リアルでは出会えないね。

残念ながら俺はどこかの某主人公のようにバストスカウターのスキルを持っていないが、Dカップは確実だと思う。うん。

こうして俺が勝手に妄想していると、神官がルエリアを紹介してくれる。

「ガッツさん、彼女がルウアです。ルウア、この方があなたを訪ねてみえたガッツさんですよ」

ルウアは肯くと、改めてこちらを向いてお辞儀をした。

「はじめましてガッツさん、巫女見習いのルウアです。探していた

素材を持っ てきていただいたと伺ったのですが？」

「ああ、ラジャフ街道でルエリアの依頼で狩りをしていたんだが、一緒にクモを仕留めたんだ。そこで誰かがクモの素材を探していると聞いてここに來た訳だ」

「よかった。実はエブラ様にお使いを頼まれたんですが、それがござり紐の製作だったのです」

「それならそれほど難しくないんじゃないか？」

「それが紐の材料から集めなくてはならないのです。その材料となる糸はラジャフ街道にいるウェブメーカーから取れるのですが、私、クモ苦手なんです…」

「それも試練の一つという訳だな」

「はい。ただし、私の場合はあの姿を見ただけで失神しそうなので…」

ルウアは消え入りそうな声で答えた。

「それならこの素材は役に立ったと言うことが」

俺はバッグに手を入れるとイベントリでウェブメーカーの糸を選択し、取り出して見せた。

「これ！これです、これが欲しかったです！」

ルウアは飛びっきりの笑顔を見せたが、表情を改めるとこちらを向

いて懇願した。

「更なるお願いで申し訳ありませんが、この依頼者を材料屋のアトラさんに渡してもらえないでしょうか？ かざり紐の装飾具が必要なんです」

俺に好みの女性の願いを断るという選択はほぼ無い。

「いいだろう。材料屋のアトラに渡せばいいんだな」

肯くと依頼書を受け取った。

「ありがとうございます。私はその間に、糸を紡いでおきますので隣にいた神官も一言添える。

「ありがとうございます、ガッツさん。本来は自らが素材を準備する場合が多いのですが、神官や巫女は人との繋がりも重要ですのでこうやってお願いすることもあるのですよ」

「まあ縁があつたってことだな」

深々とお辞儀をするルウア達に見送られて広場に面している材料屋のアトラの所へ向かう。

材料屋とは生産することを目的とした素材を売っている店だが、簡

単な加工をして売る場合もあるのだ。

広場まで来るとウィンドウで店にアトラが居るのが確認出来たので声をかける。

「ルウアに使いを頼まれて来たんだが、あんたがアトラか？」

「そうだが、何だ？ ああ、神殿の巫女のルウアか。お前も大変だな。どれどれ、依頼書を見せてくれ」

俺はアトラに依頼書を渡す。

「かざり紐の装飾具が要るのか。こりゃ…作るのはいいがニンギシユダの樹皮が必要だな」

ニンギシユダとは神殿が神木として、よく神具の材料にしている木だそうだ。

「依頼された装飾具を作るには、ニンギシユダの樹皮が必要だ。悪いが、採ってきてくれないか？」

「それはいいが、どこに生えているんだその木は？」

「ラジャフ街道のどっかだったと思うが…、近くに石碑があったよ。うな気がするかな」

それならば何となく位置を覚えている。

「分かった。今日はもう日も落ちるから、明日にでも樹皮を取って来るとするか」

「すまないが頼んだぞ」

こうしてアトラの元を去った俺は宿へ向かった。

宿へ行くと外にいたアドナーンが俺を見つけて声を掛けて来た。

「ガッツさんご無事で戻られて何よりです。依頼はうまく行きましたか？」

「ああ上出来だな。既に商隊の荷物はルエリアに届けてきたところだ」

「それはそれは。詳しい話は後で聞かせてください。お疲れでしょうからお部屋へどうぞ。同じ部屋を空けておりますのでカウンターで鍵を受け取ってください」

肯いて俺はカウンターのアイリーの元へ向かう。

「ガッツさん、お帰りなさい。ご無事でよかったですわ」

「また世話になる。2泊で頼む」

「かしこまりました、こちらが部屋の鍵です。料金はまた50銅で結構です。お部屋で体の埃を落としたら食堂へどうぞ」

鍵を受け取った俺は50銅を渡すと部屋へ向かった。

部屋でやっと重い鎧を脱いだ俺は、体を濡れた布で拭いて汗を取る
と軽装の皮鎧に着替えて食堂へ行くことにした。

食堂ではアドナーンが待っていて、カウンター席に座っていた俺の
所に料理の注文を取りに来た。アイリーンの方がいいのに…。

お勧めの川魚の香草焼き定食を頼んだ俺にアドナーンが聞いてくる。

「ガッツさんはエール（ビール）はやらないんですか？」

大人の男なら食事と一緒にエールを飲むのが常識だから不思議だっ
たかな。回りも大概飲んでるしなあ。

「この街の雰囲気慣れない内は自重してたんだ。酔っ払って身包
み剥がれたらことだからな」

軽いジョークで返すとアドナーンが提案してきた。

「またまた旦那。それなら今でしたらいいんじゃないですか？村長
の娘さんや衛兵さんともお知り合いになったみたいですし」

「よく知ってるな」

「商売柄人がよく出入りしますからね。それはそうと、今日の狩り
の話を後で聞かせてくれませんか？」

「ラジャフ街道での狩りなど、それほど珍しい話でもないだろう？」

「私は冒険者の話を聞くのが趣味なんですよ。お礼にエールを1杯サービスさせてもらいますから」

そこへ他のテーブルへ料理を運ぶために側を通ったアイリーンが声をかける。

「あなた、ガッツさんにご迷惑をお掛けしてはだめですよ。すいません、うちの主人はどうにも冒険者の方の話を聞くのが好きらしくて。もしご迷惑でなければ後で話してやってください。仕事に実が入らなくなると困りますから」

苦笑するアイリーンを見て、俺は食事の後で話することに了承した。

その後、配膳された川魚の香草焼き定食とエールを平らげて、さらにエールを1杯追加注文する。

ガッツの身体はアルコールに強いらしく、1杯ほどでは酔いもあまり感じられない。

本来の自分なら1杯で顔を赤くするお得な？体質なのだから、身体に大きな変化あるのだろう。

そのうちに仕事を一段落したアドナーンがやって来たので話をしやることにした。

7 イシターの巫女見習い(1)(後書き)

誤字、脱字、誤り、勘違い等は適宜修正したいと思います。

2011・12・22誤字修正(checkerさんありがとうございました)

8 イシターの巫女見習い（2）

「そうですか、1日で商隊の積荷を22個も回収するとは…。かなりの実力をお持ちだとは思っていましたが予想以上でした」

「ルエリアも驚いていたがそれほどのもんなのか？モンスターの實力は低かったぞ？」

「普通は飛行系モンスターを倒す場合、前衛の戦士と後衛の魔法使いが組まないと狩りが難しいものですからね。戦士だけでは剣で1合するのが精一杯でしょう」

「モンスターをスキルで挑発してやれば難しくはないだろう？」

「…ガッツさんはもしかしてスキルをお持ちなんですか？国に實力を認められた冒険者にしか使えないと聞いたのですが…」

えっ、だって挑発スキルのプロヴォークはMMO開始時に入国審査官から簡単なクエストで手に入れられるもんじゃなかったっけ？

でも普通に考えたら襲われやすくなるスキルって、ある程度Lvが上がってからでないと危険かもしれない…。そこで、

「…俺の場合は自分の国で手に入れたスキルだから系統が少し違うかもしれないがな」

とアドナーンに言って強引に誤魔化してみる。

「そうだったのですか。危険と隣り合わせのスキルですから実力が
ないと使えないでしょうね」

「俺も最初は慣れない武器に手間取ったが、最後はそこそ振れる
ようになったから問題は無かったぞ」

「さすがですね。普通ソロで狩りをすれば2日はかかると
思いますよ」

「運も良かったんだろうよ」

フェザームーブ？で移動時間が短縮出来たのも大きかったしな。

「ところでガッツさん、ラットもかなり狩ったんじゃないですか？」

「ああ、クモとラットも狩ったが、それが？」

「もしラットの肉を処分していなかったら私もへ卸していただけ
ませんか。燻製用に欲しいと思っていたんですよ。雑貨屋よりは
多少色を付けますから」

そうなのだ。俺のイベントリにはなぜかディンギラットやラジャ
フラットの肉がある。

ラット系は金属や皮しかドロップしなかったのだから、これもこの
世界の新しいアイテムなのだろう。

それもモンスターごとに皮や肉の種類が違って表示されるところが
目新しい。

「それほど数は無いが、自分で加工する予定も無いから譲ってもいいぜ」

「それでは通常の1割り増しということで、スモールやディンギイなら1個10銅で、ラジャフなら15銅で買い取らせていただきますのですね？」

「その値段で問題ないが、ラジャフが少し高いのはなぜだ？」

「はい、狩場が遠いので希少価値が高いことと、こちらの方が美味しい肉なのですよ」

バビリム平原でもラットを狩って干し肉にするクエストがあったからモンスターの肉でも食用にはなるんだなあ。

「では引き取ってもらうか。ディンギイが5とラジャフが7だ」

「ありがとうございます。それでは合わせて155銅で買い取らせていただきます」

俺はステイタスカードをアドナーンに触れさせトレードを行う。

「確かに受け取りました。機会があれば、またお譲りください」

「こっちこそいい値段で引き取ってもらってありがたい」

「今度はうちのアイリーン特製、美味しいラットの燻製を一度お試しください。微量ですが体力回復効果もありますから」

「ふっ、商売上手だなアドナーン。後で少し分けてもらおうとするか」

「これまたありがとうございます。サービスさせていただきますよ」
そう言つて微笑むアドナーンを背に俺は部屋へ向かい寝ることにした。

ゆっくり目に起床した俺は食堂で朝食を取ると、ニンギシュダを木を探すためラジャフ街道へ向かう。

記憶が合っていれば“石碑”が近くにあったと思う。

正式名を“郷愁の石碑”といい、ゲーム中に死んだ時に復活するポイントとして登録したり、移動術でワープできる場所なのだ。

ラジャフ街道をダッシュとウォークを繰り返しながら進むと、30程してから右手に石碑を発見できた。

近くにある大木がニンギシュダの木らしい。分かりやすく解説の碑が前にあった。イージーじゃねえか。

早速俺はニンギシュダの木に手を合わせると短剣で樹皮を剥ぎ取るとバッグにしまった。

ついでに近くのモンスターも軽く狩りながらラジャフへ戻ることにした。

材料屋に行くとアトラが居たので声をかける。

「おい、取ってきたぞ」

「おお、ニンギシュダの樹皮を持ってきたか。ちょっと待っていてくれ…」

アトラは店の奥へ行くと何か作業をして戻ってきた。

「これがルウアに頼まれた装飾具だ。早く持っていてやってやりな。首を長くして待っているだろうからな」

「ああ、持って行ってやるよ」

軽く手を上げて挨拶して店を出ると、偶然広場でルエリアとルウアが二人で話しているのを発見した。

「ルウア、装飾具が出来たぞ」

「あつ、出来たんですね。よかったです、助かりました。早くエブラ様に渡さないと！これ、たいした物じゃないですが受け取ってください。このくらいしかお礼できないですけど…」

そう言うところルウアはブロンズイヤリングを取り出して俺に渡した。

「報酬が目的で依頼を受けた訳じゃないが、その気持ちとして貰っておくぜ。タダほど高い物は無いからな」

「ガッツさん、ありがとございました」

ルウアは深く頭を下げると、急ぎ足でイシター神殿へ向かうのを見送った。

ううん、いい光景だ。豊かな胸がゆさゆさと揺れている。あれに挟まれたらさぞかし…。

いろいろムフフな妄想中の俺だったが、隣に居たルエリアが声を掛けてくる。

「何見てんのよ!」

「い、いや、走り難そうだから転ぶんじゃないかと心配で…」

「まあいいわ。ルウアの依頼もクリアしたようだし、やっぱりやるわねアンタ」

「普通にやっただけだな」

「うん、あなたになら任せてもいいかもしれないわね」

「何のことだ?」

「実は、神殿のエブラ様から相談事を受けているの。腕の立つ冒険者を紹介して欲しいって言われてるんだけど、話を聞いてあげてく

れないかしら？」

「神殿か、面倒なのは避けたいんだがな」

「エブラ様に会って、話を聞いてあげて欲しいの。あなたなら大丈夫だと思うわ。聞いてくれないと、エロい目線で見えていたってルウアに言いつけるわよ」

「わ、分かった。エブラ様の話を聞けばいいんだな？」

「分かればいいのよ。そうと決まったらエブラ様のところへ行くわよ、付いて来て！」

そう宣言するとルエリアも急ぎ足でイシター神殿へ向かうので俺もそれを追った。

ふっ、残念ながらルエリアのあれは揺れないようだ。

「…何か言った？」

「…何にも」

彼女はテレパスなのか？多分、ただの女の感だろう。もちろんそれでも十分脅威だな。

こうして二人はイシター神殿へ向かうのだった。

8 イシターの巫女見習い(2) (後書き)

誤字、脱字、誤り、勘違い等は適宜修正したいと思います。

9 神官の願い（1）

ルエリアとガッツがイシター神殿に向かうと、神殿の前の広場でルウアが初老の神官と何か話しているのが見えた。

「ガッツ、あれがエブラ様よ。失礼の無い様にね」

そう言つてルエリアは神官に近づくと俺を紹介し始めた。

「こんにちはエブラ様。探していた腕の立つ冒険者を見つけたので連れてきました。ガッツさんです。既にルウアの依頼も済ませています」

「ほほう、ルエリアが認めた冒険者ですか。なかなか腕も立つようですね。ルウアからも聞いていますよ」

「買いかぶられちゃ困るんだがな。神官様の頼みだから内容によっては引き受けてもいい」

まあ、大体の内容は知ってるんだけどね。

「実は、神殿で飼っていた狼がここ最近姿を消してしまったのだ。シルバーファングと言うんだが、なかなか賢い狼で……。この神殿の祭事にも神獣として色々と参加させていたものなのだ」

「それがなぜ居なくなつたんだ？」

「分からのだよ。旅の商人にもそれらしい狼を見なかったかと聞

いているのだが、最近は塔の影響もあって物騒になっているだろう？あまり情報も集まらなくてな」

「あまりにも漠然とした話だな……」

「そこを何とか探してきてはくれないだろうか？勿論、礼はするつもりだ」

「うん。ルエリア、何か情報はないのか？」

「ひょっとして…、このことは関係ないかしら？」

「何か心当たりがあるのか？」

「ええ。少し前に街道で荷馬車を襲われた行商人がいたんだけど、背中になんか大きな傷があってね」

「それで」

「ラジャフ街道で襲ってきた狼たちを何とか撃退しているうちに、出てきたすごい大きさの狼にやられたらしいの。今の話に関係するかどうかは分からないけど」

「それですよルエリア！いいフリするね。」

「狼か。共通点としてはあるから調べてみる必要があるな」

「襲われた商人の背中には大きな傷があったらしいわ。その時の記録書もあるから後で見るといいわ」

この話を隣で聞いていた神父が肩を落としてつぶやいた。

「背中に大きな傷か…。シルバーファングは他よりも体の大きな狼だったのですよ。そう考えるとその狼は彼しかないでしょうね…」

「でも神父様、それがシルバーファングと決まったわけでは…」

重苦しい雰囲気皆の間に流れるが、そこを俺の言葉で現実引き戻す。

「どうするんだ。人を襲っているとなれば問題じゃないのか？」

「…ああ、信じたくは無いがこれも塔の魔力の影響なのか…。ガッツ君、更なる依頼で申し訳ないが、彼がこれ以上人を殺めないように君の手で天に帰してやってはもらえないだろうか」

「でもエブラ様、シルバーファングの事は子供の頃からとても大切にしていっちゃったではないですか。元に戻す方法はないのですか？」

「ありがとウルエリア。多分、彼もそれを望んでいるだろうし、ラジャフの民のためにもならないと思うのだよ」

「そこまでの覚悟なら俺に依存は無い。シルバーファングを探して彼を人を襲うのを止めるとしよう」

「頼む。…シルバーファングを止めてくれ！彼にとっても、きっとそれが最善だろうから…」

搾り出しようにつぶやくエブラ神父の声を聞き、俺は正式に依頼を

受けた。

商隊を襲った狼の記録を見るため、俺はルエリアと一緒に村長の家へ向かう。

「これが記録書よ。ラジャフ街道の東で襲われたらしいわ。ドルアイガの塔に近い所ね」

「襲ったのはシルバーファングだけではないようだな。他にも狼数頭が居たと書かれている」

「あのあたりはヤングウルフやアダルトウルフが元々居るところね。以前は街道近くまで来て人間に危害を加えることは無かったらしいわ」

「やはり塔のせいかな。シルバーファングが他の狼を率いているとなればやつかいだな」

「そうね。いくら鎧で覆われていても、一度に数匹から襲われるとまずくないかしら？」

「ああ、そのためにも一度ヤングウルフたりと戦ってみようと思う。これからすぐにでも出発するつもりだ」

「そんなこと言って準備は大丈夫なの？それにもう日も高いから暗

くなるまで時間が無いわよ」

「既に神木まで行くのに準備はしていたし、それに今日は試す程度だから本格的に戦う気は無い。最低限の装備以外はバッグに入れて走ること移動時間も短縮するつもりだ」

「それならいいけど…。無理しないで戻ってくるのよ！怪我でもされたら困るわ！」

「それではお嬢様のおっしゃるとおりに」ニヤリ。

「そつ、それでいいのよ」

なぜかルエリアは腰に手を当て、恥ずかしそうにしながら言う。

うん、何となくからかうツボが見えてきたかもしれんな。

「それじゃあな」

俺は早速、ラジャフ街道へ向かった。

ラジャフ周辺で街道を移動するだけならモンスターに襲われることは少ないため、俺は装備していた鎧をバッグにしまった。

元々この辺りはノンアクティブ（攻撃しなければ襲わない）のモンスターが生息していたが、設定でテリトリーが草原とでも認識され

ているのだろうか？

まあ、普通の野生動物だって人が居る場所は嫌うがまったく現れない訳じゃないかならな。

運良くモンスターに遭遇せずにラジャフ街道を爆進した俺は、ウルフが生息するエリアの街道に立っている人物を見つけた。

多分うざいあいつだ。ターゲットしてステータスの名前を確認する。

やっぱりな。放浪の冒険者ボウケン、ウルフを狩るクエストを吹っかけてくるヤツだ。

近くで狩りをするのに知らない振りも出来ないから声を掛けるか。俺は大人だからな。

「俺は冒険者のガッツだ。この辺りで狩りをするがかまわないか？」

「ほう。私は放浪の冒険者ボウケンだ。ここで狩りをすると言つことはネズミやクモは倒してきたようだな」

「もちろんだ。もう少し上のヤツを狙おうかと思つてな」

「ひょっとして「俺って強くない？」と思つたりしてないか？しかし、それこそ思いつきと言つものだ。まさに カワズ オブ イノナカ！ このボウケンがキミのその伸びきった、だらしない鼻をへし折ってやろう！」

「ニヤッ」どうやってへし折ってくれるんだ？」

「どうだねイノナカのガッツとやら、私の挑戦を受けるかね？まあ、逃げてもいいのだがね。クッククク…」

「どんな挑戦だ？」

「ハッハッハ！キミには出来ないと思うが、やってみるというのかね？ 受けると言うのなら挑戦の内容を説明しよう！この辺りに居るヤングウルフの牙を5個、2時間以内に集めるのだ。キミにはこれが出るかね？ちなみに私には楽勝だ！」

「いいだろう。その挑戦を受けよう。ちょうどヤングウルフを狩るつもりだったんだ。いい励みになる」

「そうか。ではガッツ、君の健闘を祈る」

コイツどんだけ上から目線なんだよ。でも、狩猟時間が延長されているのは助かるな。

システムの亜種かどうかは不明だが、狩りをしたり街道を移動する時に一番近くのモンスターの気配を察知できることが分かった。

だとしても、移動を考えるとこれだけ広い草原で狼を狩るのは簡単じゃないと思う。

俺は遠くにヤングウルフらしい気配を察知すると移動を開始した。

9 神官の願い（1）（後書き）

誤字、脱字、誤り、勘違い等は適宜修正したいと思います。

10 神官の願い(2) (前書き)

感想のご指摘から描写をもう少し頑張ってみようと思います。たぶん実力不足の為、対前文比10%upp程度かとは思いますが…。

これとはまったく無関係ですが、橙野ままれさんの「ログ・ホライズン」が連載再開したようです。楽しみですね(^^)

10 神官の願い(2)

ヤングウルフの気配を察知して草原を進んだ俺だったが、近づいてみて状況が良くない事が分かった。

このモンスターは体長が1.5mほどで、大型犬と変わらないぐらゐの大きさなのだが、群れを形成しているのだ。

もちろん野生の狼が群れで生息していることはよく知られたことだ。

ただし、ラジャフ街道のモンスターは初級者用だから基本あちらから襲ってくることはなく、1対1での戦闘が殆どなので楽だった。

それが今回は5頭が群れになった状態なのでどうしようかと思い慎重に近づいたが、よく考えれば悩むほどではなかった。

自分のLvと装備ならLv4ヤングウルフの攻撃など気にならないのが当たり前なのだ。

恐らく多くてもHP減少1で0もありうる程度。心配して損した。

プロヴォーグで近くのヤツから誘導して狩るとしますか。

スキルを受けた狼は攻撃をされたと感じ、真っ直ぐこちらへ向かってくる。

むむ、さすがに狼だけあって意外と動きが早い。初級の冒険者がソロで戦闘になったらパニくるかもね。

ただし、こっちは中級なので能力補正がある為か十分動きも捕らえられるようだ。

自分の敏捷性のステータスはそれほど高くないけど腕力はあるので見れば攻撃を当てるのは難しくない。

剣を上段に構えた俺は、ヤングウルフが飛び掛ろうとする動きを体捌きで左へかわすと、その胸を上から両断して屠る。

戦闘に気付いたほかのウルフも端から各個撃破していく。

最後の2頭は一斉に襲ってきたが、1頭の攻撃をかわしながら片方を切り下ろして両断した後、かわした1頭へ向き直り、首に突きを入れて屠った。

戦いに慣れてきたのか剣技で突きまで使えるようになったようだ。

中学校で体育の時間にやった剣道では突きは禁止だったのが、これからスムーズに出せるよう練習してみようか。

結局狩ったのはヤングウルフ4頭と、それを統率するアダルトウルフ1頭だった。ヤングとアダルトに個体差はあまり感じられない。経験差なのだろうか？

意識しない内にもう少して最初の戦闘でボウケンの挑戦クリアするところだったようだ。

この調子で次の挑戦で言ってくるであろうLv5アダルトウルフ5頭も狩ってきますかね。

結果としてはアダルトウルフを5頭倒すため合計で1時間半ほど掛かった。

理由は群れに多くてもアダルトウルフが1〜2頭しかいないため、広い草原で群れを5つも狩る必要があったからだ。

剣の実践練習も気が済んだのでボウケンの所へ報告しに行くことにした。

「どうしたんだね。もう諦めたのかガッツ？」

「いや、仕留められたから報告に来たんだが？」

「すわっ、まさか?!（私は他の冒険者4人と一緒に戦って1日かけてやっと倒したのだぞ!）」

「カードを確認すれば分かることだ」

「…まあいい。キミはただのイノナカではないと言う事か。しかし、私からの真の挑戦はまだ用意してある。この程度で慢心してもらっては困るのだよ!」

「（それも知ってると思うが）その真の挑戦とやらはなんだ？」

「ふっふっふっ、アダルトウルフの爪を5個2時間以内に収めることだ。そして、これを達成出来るのは世界広しと言えど私だけだ、と言っておこつ」

「その依頼もついでに達成できたようなんだがなあ」

「な、なんだとー！ぐ…ぐぬっ…、まさか両方一度に達成するとは…。この私ですら…げふんげふん。いやなんでもない」

「それではカードを確認してくれ」

「うむ、本当のようだな…。まあ、これに慢心せずに精進することだ。あと、キミにはこれをやろう。私に認められたという証だ。大切にしまえ！」

そう言つてボウケン は青銅製の片手剣コピシユとブロンズネックレスを俺に渡す。

「ありがたく頂いておくとしよう」

こうしてボウケン と別れ、ウルフとの鍛錬を終えてラジャフへ帰ることにした。

次の日、改めてシルバーファングを止めるためラジャフ街道を走る。

記憶では、南東の溪谷の奥にシルバーファングが居たはずだ。

ただし、あの周りには親衛隊のようにウルフ達が屯^{たむろ}していた。

注意しながらウルフの群れを3つほど倒し溪谷を抜けると、後ろの斜面に岩肌が見える広場にこれまでのウルフ達とは違った雰囲気をもつ者達が居た。

あれがシルバーファングの親衛隊のようだ。3頭ほどいるが一騎当千という感じがする。

それでも今の俺にはまったく問題ない程度の強さだが。

俺はブラックファルクスを両手で握ると向かって右端のアダルトルフをスキルで誘導して一刀両断する。

さらに気付いた他の2頭が一瞬怯んだ隙を見逃さず、素早く剣を突き入れて1頭を仕留め、最後の1頭も下段から切り上げた剣で腹から胴を裂いた。

悲しげな叫び声を上げながら消えるウルフ達だったが、ここで岩肌の上から殺気を感じる。

視線を向けるとそこには銀色の見事な身体を持った、巨大な狼が牙をむき出しにしながらこちらを見つめていた。

エブラ神父は他よりも少し体が大きい狼だったと言っていたが、そんな程度ではない。少なくとも体長10mはあるはずだ。

イメージとしては狼と香辛料のホロが実体化した状態が近いかもしれない。アニメを見た人なら分かってもらえると思う。

シルバーファングはその身体からは想像できない身軽さで岩肌の上から飛び降りると、ズーンという音と共に俺の前に立ちふさがった。Lv的には瞬殺できるはずの相手だが、興味があつたので話しかけることにした。

「お前がシルバーファングか？」

すると頭の中に直接感じるような声が聞こえる。

『そうだ。私がシルバーファングだ。お前はだれだ？』

「（テレパシーか？）俺はガッツ。エブラ神父に頼まれてお前を止めるために来た」

『そうか、エブラ神父が…』

「お前は人を襲うことを止めることは出来ないのか？」

『残念ながら現在の私は自分の身体を一部しかコントロール出来ない。塔の魔力の影響で魔狼としての本能が呼び起こされ、身体も巨大化してしまったのだ』

「今は攻撃を抑えてられているんじゃないのか？」

『これも全力でやってた。この状態も長くは持たん』

「そうか…。残念ながら俺やエブラ神父にもお前を魔力から解放することは出来ない」

『…その剣で私を止めてくれ。お世話になったラジャフの人々やエブラ神父に牙を向けることになるのは耐えられん』

「申し訳ないがそれしか手が無いようだ。シルバーファング、あまり苦しまずに送ってやる」

『頼むぞガッツ。エブラ神父に「ありがとう」と伝えてくれ』

「ウオオオオーツ！」

その天にも響く遠吠えの合図で、シルバーファングの身体は呪縛から放たれたように俺を襲う。

直径1mを超える丸太のような前足が横なぐりに振るわれて俺を襲う。

1撃目はかわせたが、体制を崩したため2撃目の鋭い爪を剣で受けることになる。

ガキイイーン！ドゥツ！

剣と防具で守ったためHPは少ししか削られなかったが、5mほど派手に後ろへ飛ばされてしまう。

そこへシルバーファングが飛ぶように移動し、恐ろしい口を開けて俺をかみ殺そうと襲い掛かってきた。

「ガウウーッ！」

咄嗟に俺は剣を抱え込み、前転をしながらシルバーファングの身体の下へ潜り込む。

モンハンの大型モンスターと戦う時の要領だ。逃げるより前へ出たほうが活路を開けることもある。それに…

ズシュッー！

俺はシルバーファングの腹に剣を突き上げた。腹はどのモンスターも防御が甘いのだ。

素早く腹の下を抜けて距離を取ると、シルバーファングが少し弱っているのが分かる。

切りつけたところからおびただしい血が流れ出て、腸が少しはみ出ているのが見える。

しかし、油断は禁物だ。手負いの獣は凶暴さが増すからだ。

口からよだれを垂らしながら、赤く充血した鋭い目でこちらを見つめるシルバーファングは恐ろしいの一言だ。

だが今度はこちらが主導権を握らせてもらう。

ジグザグに移動しながらシルバーファングに近づいた俺は、前足の攻撃を前転して避けると、起き上がりざまにもう一方の前足を横なぎに切り裂く。

ズバッ！ ドウーッ！

弱っていたシルバーファングは自重に耐え切れず、躓くように前へ倒れこんだ。両断は出来なかったが、筋肉を断てば立ってはいられない。

チャンスだ！俺はシルバーファングに近づくと折れ曲がった前足をジャンプ台にして首の上へ飛び乗った。

腰だめに剣を構えた俺は、首の後ろから剣をシルバーファングの頭へ突き入れる。

ガスッ！グシュッ！

「キャウウーーン！」

さすがのシルバーファングも脳へ直接攻撃を加えられれば生き長らえはしないはずだ。

ブシュッ！

剣を引き抜くと血飛沫が噴出する。痙攣する身体から飛び降りた俺は、再び剣を構え不意の攻撃を警戒する。

シルバーファングは血走った目が光を失うと、その目蓋と捲れ上がった口を閉じて息を引き取った。

その身体は光に包まれて消えたが、消える前にその口が微笑みを浮かべていたと思ったのは気のせいだろうか。

いや。彼は最後にエブラ神父との思い出と一緒に天へ召されたのだ
と思いたい。

10 神官の願い(2) (後書き)

誤字、脱字、誤り、勘違い等は適宜修正したいと思います。

11 悲しい報告（前書き）

なかなかストーリーが進行しません。早くラジャフから脱出したい。

11 悲しい報告

シルバーファングを殺すことで依頼を終えた俺は、このことを報告するためラジャフへその足を向けた。

途中で5〜6頭程度のウルフの群れに3度襲われたが、シルバーファングとは格が違いすぎるためか簡単に退けることができた。

モンスターを出来るだけ避けるよう街道を移動してもエンカウントが多かったのは、シルバーファングを倒した残り香のようなものをモンスターが嗅ぎ取っているのだろうか？

これについては単なる想像の域でしかないので分からない。

ラジャフに戻った俺は、そのままイシター神殿のエブラ神父の下へ向かう。

神殿に着くと巫女見習いのルウアを見かけたので声をかける。（しかし、いつ見てもナイスバディだ！）

「ルウア、エブラ神父を呼んでくれないか？報告することがある」

「ガッツさん、お疲れ様です。シルバーファングの事ですね？お呼びしますから少しお待ちください」

10分ほど待つと、ルウアがエブラ神父と供に歩いてくるのが見えた。

「ガッツ君、君が来たと言う事は依頼が完了したということだね？」

「そうだ。シルバーファングは俺がこの手で天に送った」

「…そうか。シルバーファングを…、止めてくれてありがとう。彼もきつと、君には感謝していると思うよ」

「不思議なことだが、俺はシルバーファングと少しだけ話すことが出来たんだ」

「シルバーファングと？賢いとはいえ、神殿に居た頃はそんなことは出来なかったが…」

「ああ、魔力のせいで体長10m近くになった身体は自由に動かせなかったらしいが、精神力もそれなり強化されただろう。思念を直接俺に伝えてきたんだ」

「いつも彼の声が、何を思っているのかを知りたいと願っていたが、こんな事で実現するとはね…」

「あいつは最後にエブラ神父に伝言を残した。「ありがとう」と伝えて欲しいそうだ」

「ありがとう…。そうか、彼がそう言ったのか…。これはささやかだが依頼のお礼だ」

そう言うと、エブラ神父は俺に1銀貨を渡した。

「確かに受け取った。他に俺に出来ることは無いか？」

「すまん。今は何も考えられない。申し訳ないが、少し一人にしてくれないか…」

エブラ神父は寂しそうな顔を見せると、神殿の奥へと静かに消えていた。

「すいませんガッツさん。エブラ神父は友人を亡くされたような気持ちなのだと思います。昨日ガッツさんに依頼をした後も、どこか憔悴している様でした」

「そうだな。神父はシルバーファングとペットを超えた、友人とも呼べるほどの関係を結んでいたんだろう。後は時間が解決してくれるのを待つしかないようだ」

「はい。微力ながら私たちも神父を支えて行くつもりです」

そう言ってルウアも神父を追うように小走りで神殿の奥へ向かった。

…感傷的な場面でしたが、自分的にはルウアの揺れるバストが見ですが何か？

辛い現実には癒しが必要なんですよ。あれはその為に神様が授けた物に違いありません。

エブラ神父は違つかもしれませんが、世の多くの男性なら分かってくれるはずですよ？

実際に依頼とはいえ「あなたの大切な友人^{ペット}を殺してきました」なんて言いに来るのは辛かったですよ。

おまけに殺した相手の遺言まで伝えるんですよ？

気が重くなるのも当たり前じゃないですか！

顔がガッツだからクールに振舞いましたけど、内心はビクビクしてましたよ。

マンガだったら絶対に縦の線が顔の側面に何本も走っているのが見えただしょうね。ガッツは肌が浅黒いから分かりにくいかも知れません。

得意先との大型契約を失敗しました、と上司に報告するより何倍も気が重かったんですから…。

大嫌いな得意先の担当者に作り笑顔で接することで鍛えたく顔面マスクの成果がここで発揮されたのだと思います。

ここは早く宿に帰って心と身体を休めることにしよう。

俺は定宿の夢屋へ足を運ぶのだった。

「お帰りなさいガッツさん」

アドナーンが迎えてくれた。俺的にはアイリーンに迎えて欲しいんだが…。

「ああ、今日も無事戻れた。中々（精神的に）キツイ依頼だったからな」

「へえ、ガッツさんがキツイ依頼ってどんなです？」

この手の話に目が無いアドナーンは食いつくように聞いてきた。

そこで俺はエブラ神父から依頼されたシルバーファングの討伐を簡単に話してやった。

これはアドナーンに話してくれるよう頼まれたからと言つのもあるが、ちょっとした情報操作と言つ側面もある。

神殿の大きな狼が居なくなったことは一部の人が知っているし、商隊を狼が襲っていることもラジャフでは知られている。

ルエリアが襲われた商隊の報告書から神殿で飼われていたシルバーファングを推測できたことを考えれば近いうちにこの考えを持つものが現れるだろう。

この情報が誤って伝われば、人を襲う狼を神殿が飼っていたことに

なり、かなりのイメージダウンになるのは避けられない。

ただし、神殿の代表者であるエブラ神父が、友人とも思っていた狼をラジャフの人々のため心を鬼にして討伐させたとなれば話は別である。

神殿とエブラ神父は、ラジャフの人々からこれまで以上の尊敬と信仰を集めるだろう。

神殿などの権力は障害にならない限り味方につけて置くべきものだ。

この話については、宿へ帰る途中でルエリアにも伝えておいたので、村長や女達の井戸端会議であつという間に噂が広がるだろう。

女子供の涙を誘うお話になるに違いない。俺も泣きながら傷だらけでシルバーファングを倒したことにすればよかったかな？

また、この話を宿で広めておけば商人や旅人達に早く伝わって物流や人の行き来も活発になると思うのだ。

「ラジャフ街道も少し安全になったと思う。商人や旅人にも教えてやってくれ」

「はい。これで商人達も安心すると思います。ありがとうございますました」

「ちなみにアイリーンはどこだ？」

「調理場で夕食の準備をしておりますが、何か？」

「ラジャフラットの肉が1つ残ったから世話になっている例に渡そうと思ってな」

「それでしたら直接渡してやってください。喜びますから。私はフロントから離れられませんので」

俺はアイリーンのいる食堂の奥の調理場へ向かった。

いつもは見る事の無い調理場だが、文化レベルはやはり中世ヨーロッパという感じがらしい。

大きな串に刺された肉がテーブルに載っており、アイリーンは暖炉のようなところで肉を焼く準備をしているようだ。

そして、次の瞬間、俺はアイリーンの行動に驚いた。

「<ファイア>」

アイリーンが暖炉の重なった薪を指差してそうつぶやくと、薪の下の小枝が燃え出したのだ！

えっ、村人が魔術を使えるの？ありえないでしょ？それに、ドラクエじゃないから<ファイア>なんて呪文なかったし…。

この世界がゲームと似た別の異世界であることを再認識した瞬間だった。

11 悲しい報告（後書き）

誤字、脱字、誤り、勘違い等は適宜修正したいと思います。

2011・12・22誤字修正（checkerさんありがとうございました）

12 異世界のスキル（前書き）

メリークリスマス！

うちのエンゲル係数はおかしい？

ホールケーキを12等分したのにショートケーキ2個分はあったよ。

12 異世界のスキル

呆然としている俺に気付いたアイリーンが声を掛けてきた。

「お帰りなさいガッツさん、どうなさいました？」

「…いや。世話になっていている礼にラットの肉を使ってもらおうと思つて来て見たんだが…」

アイリーンの魔法に驚いた俺は素直にそれを確認することにした。

「アイリーン、今のは…魔法なのか？」

「そうですね？私も初級スキルの魔法なら少しだけ使えるんです。魔力が少ないのでこれぐらいしかできませんけどね」

「それでも使えるんだな？俺の国では神官が魔法使いしか魔法は使えなかったんだ」

「この辺りではだれでも魔力を持っていて、基本的には魔法を使えます。一部の才能のある人が厳しい修行をして神官や魔法使いになるんです」

「そうなのか。時間が空いたら少しこの国の魔法について教えてもらえないか？」

「それでしたら神殿の方に教えていただいた方が詳しいですよ」

「取りあえず基本だけでいいんだ」

「分かりました。申し訳ありませんが私は夕食の準備が忙しいので、話好きのうちの旦那様に頼んでおきますね」

「ああ、悪いな。忘れていたが、これがラットの肉だ」

「ありがとうございます」

ごめんねアイリーン、仕事の邪魔しちゃって。

心の中で誤りながら、俺は夕食後の魔法講義に心を躍らせていた。

それはそうだろう？一般村民が魔法使えるんだよ。

それもくファイヤ>とかゲームで無かった魔法が。メイジの火の最下級魔法はくファイヤーボール>だったからね。

もしかするとソルジャーで魔法スキルを使えなかった俺も、この世界では使えちゃったりする？

そうすると魔法戦士に転職できたりして…。ダーマ神殿は無いけどね。ムフフ…。

何だかどんどん妄想が膨らんできそうだ。楽しすぎる。

俺の知るドルアーガの世界では、冒険者に当たるプレイヤーは皆魔力を持っていた。

しかし、魔法を攻撃スキルとして使用出来るのはメイジ（魔法使い）

とドルイド（神官職）だけだった。

ソルジャー（戦士）とスカウト（剣士）は魔力を剣技スキルで消費して攻撃していたのだ。

防御力の向上など、ステータスアップとして魔力をスキルで使うことは全職で可能だったが、＜ファイヤーボール＞などの純粋な攻撃魔法はメイジの独壇場であった。

もしも、遠隔攻撃が可能な魔法を俺が使えばかなり戦闘で有利になるに違いない。

戦闘スタイルもこれまでとは一変すると考えた方がいいだろう。

俺は夕食の味もおぼろげになるくらいに魔法について勝手な想像を膨らませていた。

「ガッツさん、お待たせしました」

アドナーンが客たちの夕食が一段落した頃にカウンターの隣の席にやってきた。

「悪いな無理を言って」

「いえいえ、いつも戦いのお話を聞いていますから少しは恩返し出来るってもんですよ」

「それじゃあいきなりだが、皆はどうやって魔法を使えるようになるんだ？」

「はい、まずは剣技や魔法スキルを売っている書店屋で必要な魔法の魔導書を買います。この魔導書にはルーンが書かれているので、それに手をあてて魔法のルーンを身体の中に取り込むのです」

「ほう…、そこは剣技のスキルを持つ時と変わらないようだな」

「そうですね。剣技の場合は秘伝や目録という形で売っているようです。ただし、それなりの強さや魔力の大きさを持っていないとルーンを身体に取り込むことは出来ません」

もしかしてこの世界ではLvやステータスを数値で表す概念がないのか？

ステータスカードで確認できるのは名前だけだし、アイテムも表示する意思がないと認識できないくらいだからな。

「ルーンを取り込めるかどうかは、どうやって確認するんだ？」

「書店屋には魔力や強さを測る水晶玉があつて、そこに手を当てる
と水晶玉の色が変わり、その人がどの程度のルーンを取り込めるかが分かるのです」

どんな仕組みかは不明だが、水晶玉によってLvというか熟練度や魔力を図ることは可能のようだ。

「＜ファイヤ＞のルーンは簡単に取り込めるのか？」

「はい。初級魔法なので村人でも魔力があれば発火魔法の<ファイヤ>や水魔法の<ウォーター>を使うことができます。ただし、普通の人間は魔力が小さいので一日に2〜3度使えばいい方ですね」

「俺にも使えるだろうか？」

「もちろん使えるようになると思いますよ。戦士系の冒険者の方も最低限の初級魔法は覚えています。野宿などにも便利ですしね」

「確かに<ファイヤ>や<ウォーター>だけでも使えれば野宿やダンジョンで便利だろうな」

「ただし、ルーンを取り込む時にかなり強い頭痛がおこるんですよ。そのため通常は1日1つしかルーンを取り込みません」

「そうなのか。身体にもある程度の負担が掛かるという訳だな」

「ええ。ですから魔導書を購入したらご自分の部屋でルーンを取り込むことをお勧めします。何かあったら私どもが対応できますし」

「そうした方が良さそうだな」

「はい。また、その人によって魔法との相性があるようです。魔法には火・水・土・風・光・闇の属性があり、一部無属性の魔法もあると聞いています」

「自分に合った魔法でないと十分な力が発揮できないということか？」

「そうです。実力のある方でも上位魔法を使えるのはメイジだけですし、光属性の回復魔法は神官であるドルイドが有利ですね」

「ほう。俺の剣技スキルにも火や土の属性があるから、その系統の魔法ならいけそうだな」

「その可能性は高いと思います。それでは明日にでも書店屋に行ってみてはいかがですか？ガッツさんほどの冒険者なら他にも氷結魔法の<アイス>なども使えると思いますよ」

「それは楽しみだな。広場にある書店屋でいいのか？」

「そこで結構です。初級魔法なら50銅程度で安く購入できますよ」

「よし。まずは<ファイア>あたりか」

俺はアドナーンに礼を言って部屋へ戻った。

12 異世界のスキル（後書き）

誤字、脱字、誤り、勘違い等は適宜修正したいと思います。

13 魔導書購入

次の朝、俺は朝食を取ると魔導書を購入する為に書店屋へ行った。

村の中央にある円形の広場に面したところに書店屋はある。武器や防具などを売る店も広場に面しており、一番賑やかなところだ。

ログハウス風の広さが店に入ると、カウンターにがっしりした身体の50歳ぐらいの男と魔法使いとおぼしき60歳ぐらいの老婆が座っていた。

おそらく男の方は剣技スキルを扱う店員だろう。元は冒険者だろうか？まず、こちらから声が掛かった。

「いらっしやい。旦那はどんな剣技スキルが必要なんだい？」

「いや。実は剣技ではなく魔法を身に付けようと思つてな」

「あんたはどう見ても戦士のようながな？」

俺は 背中にロングソードを背負っている。そう思つて当たり前だ。

「ああ、その通り戦士だ。しかし、今日は初級魔法を身に付けるために来たんだ」

「そうか。かなりの経験者だと思つたから、てっきりもう身に付けていると思つた」

「他の国から来たんだが、俺の国では戦士が魔法を覚えることはなかったんだ。それで興味があつて来てみたんだ」

「それでか。メリヤ婆、魔法だそうだぜ」

老婆がこちらを振り向いて少し驚くように声を出した。

「珍しいこともあるもんだね。戦士は魔法を使わない国なのかい？」

「ああ。メイジやドルイドしか魔法を使えなかったんだ。覚える方法も知らなかったし、戦闘職の人間は使えないものだと言憶している」

「そうかい。もしかしたら系統の違う魔法かもしれないね？」

「剣技スキルは同じようなんだが…、想像がつかないな」

もちろん、ゲームの中の設定だからどうしようもないとは答えられなしな。

「そうそう、今日はどんな魔法を覚えたいんだい？」

「まずは<ファイア>を覚えたい。剣技のスキルでは火の属性を使っているから相性は悪くないと思う」

「そうだね。そっちで十分使えてるなら上達するのも早いはずだよ」

「そう願いたいな」

「それじゃあ、この水晶玉に手を乗せてくれるかい？どれぐらいの

魔法が使えるか分かるんだよ。ルーンの発動は1回だけだから返品が利かないからね」

「ルーンを発動させてから使えませんかでは困るからな」

「まあ、＜ファイア＞なら魔力が少しでもあれば使えるけどね。魔力の判定は色で分かるけど、初級は赤で、中級だと青に水晶玉の色が変わるんだよ。色が濃くなるほど魔力が強いんだ」

「ものは試しだ。やってみよう」

「あんたはかなり熟練の戦士のようなだから、少し濃い目の赤が出るかもしれないね。この店でそんな魔導書は扱っていないけど上級を使うメイジは緑になるって言うよ」

俺は直径15cmほどの水晶玉に手を乗せた。すると少しどころか、かなり濃い赤が水晶玉に色付く。

「えっ！こんなに濃い赤が出るなんて…。あんた戦士なんだろ？こんな濃い赤なんて普通は出るはず無いんだがねえ？この水晶玉がおかしいのかね…」

メリヤ婆が首をひねってぶつぶつ言っている。…よく考えてみたら俺は戦士職とはいえ2次職となり、Lvも中堅なのでステータスのMPは250程度だった。

別アカウントで使っていたLv30メイジのMPが350を超えるぐらいだったような気がするから、250だとLv20に近いメイジと同じぐらいかもね。

この世界ではLvの高い戦士いないようだから、このMPはチートになるらしいな。どうやって言い訳すればいいか…。

「もしかすると祖母のせいかもしれん。母方の祖母なんだが、かなり力のあるメイジだったと聞いている。親には魔力があると聞いていなかったんだがな」

「うーん、隔世遺伝でやつかねえ？それでなくちゃこの水晶玉が壊れてることになるんだけどね」

こんな程度の嘘で誤魔化すのは難しいと思ったが、勝手に納得してくれるようだ。

「取りあえず魔力があることは分かったから＜ファイア＞の魔導書を売るよ。50銅だよ」

俺は50銅をメリヤ婆に渡して＜ファイア＞のルーンが刻まれている羊皮紙を筒状に丸めた魔導書を受け取った。

換算すると5千円ぐらいだから意外と安い気がする。生活に密着した魔法だから需要が多い為かもしれない。

「いろいろな魔法を覚えるのもいいけど、一つの魔法を熟練させることも大切だよ。同じ魔法でも使う魔力量とイメージの強さで威力が違うからね」

「魔法によって使う魔力は同じじゃないのか？」

どんなゲームでも魔法によって使うMPは同じだったから少し驚いた。ゲームによってはスキルで使用MPを半減出来たりはしたが。

「魔法によって最低限の魔力は必要だけど、上限は自分で決めるんだよ。まあ、初級魔法にたくさん魔力を使っても威力は高が知れたもんさ」

宿でアイリーンが使っていたくファイア>は焚きつけの小枝に火を灯す程度だったけど、俺が調節しないで使ったら火柱が立つかもしれないな。

「けどあんたは魔力量が馬鹿でかい可能性があるから十分注意しないとな」

室内で誤って使って宿を全焼させては大変だ。ラジャフ街道の人気の無いところで練習するしかないな。山火事も注意だな。

俺は他にも魔法のことをいくつかメリヤ婆に聞いて礼を言うと宿に帰ることにした。

宿に帰って夕食を取った後、部屋でメリヤ婆に聞いた話を頭の中で少し思い浮かべる。

ある程度の経験を持った冒険者なら魔力を持っていて、経験が増えて実力が上がると魔力も増えるらしい。

これはLvアップでステータスが上昇するためだと分かる。前衛となるソルジャーやスカウトも少しずつではあるがMPは増えるのだ。

面白いのはメイジを目指していても魔力の上昇に伸び悩んでスカウトに転向したり、ソルジャーだったのに魔法の才能に目覚めてメイジになるものがあるらしいことだ。

水晶玉の判定のせいか俺にも「本当はメイジの方が向いてるかもしれないよ」と言っていた。

メリヤ婆も若い頃はメイジとして冒険者をしていたそうだが、そういう者を何人か見ているらしい。

魔法は使う魔力量とイメージの強さが大切らしいが、魔力量は数値で調節できそうな気がする。

また、イメージの方も本・マンガ・アニメで20年以上培った魔法知識があるから大丈夫だと楽観している。

精神的なものはメンタルコントロールが重要だから余裕があった方がいいはずだ。

そんなことを考えながら俺は「ファイア」の魔導書を開き、ベッドに座ってルーンをその身に受ける準備をする。

ベッドの上に開いた30cm四方形程度の羊皮紙には、中心に半径15cmぐらいの簡単な円形魔法陣が刻まれており、それは蛍光塗料のように薄く発光していた。

メリヤ婆によれば、「<のルーンを我が身に」と言って開いた片方の手のひらを魔法陣の上に載せるだけらしい。やけに簡単だな。

頭が痛くなるのはいやだが仕方が無い。俺は右手を羊皮紙にのばすと、

「＜ファイア＞のルーンを我が身に」

と言って手のひらを魔方陣の上に載せた。

「ぐっ！」

こめかみの辺りに痛みが走る。思っていたより軽いが、ひどい二日酔いの朝と同じぐらいは痛い。

痛みが治まるまでベッドで横になるしかないようだ。毛布に包まって痛みをやりすごそう。

こうして俺は毛布の中で膝を抱えながらいつの間にか眠りに就いた。

13 魔導書購入（後書き）

誤字、脱字、誤り、勘違い等は適宜修正したいと思います。

14 見習いメイジ（前書き）

あけましておめでとついでいます。 m (—) m

読んで頂いてありがとうございます。

今年が皆様にとって良い年でありますように (^ — ^) (^ — ^)

14 見習いメイジ

<ファイア>のルーンを身体に受け入れた次の朝、俺はさわやかに目を覚ました。

頭痛も完全に治まってスッキリした感じがする。もしも、魔法を使えばにこんな目に遭うとしたら、魔法を使おうとは思わないだろう。

俺は<ファイア>が無事に受け入れられたかを確認する為、頭の中でスキルのコマンドを選んで開く。

すると多く並んだ剣技スキルと一緒に、その一番上の位置に<ファイア>がスキルとして登録されていた。

よく見ると、消費MPは2と読むことが出来る。<ファイヤーボール>は消費MP8だからかわいいものだ。

これぐらいだからあまりMPの無い村人にも使えるのだろう。アイリンの<ファイア>が2〜3回しか使えないというのも肯ける話だ。

消費が2MPなら自分の場合、MPの自然回復で何度でも使えるだろう。炎の大道芸人とか出来るかもしれない。

うれしくなった俺は、朝食でアドナーンにそのことを報告すると、早速ラジャフ街道で<ファイア>の訓練をすることにした。

当分の間、俺は”見習いメイジ”となるのだ。

ラジャフ街道での訓練場所について考える。火の魔法を練習するの
で、あまり木や枯れ草の多いところは避けたい。

誤って山火事にでもなったら目も当てられないからだ。出来れば水
場や岩盤のあるところがいいと思う。

それだと思いついたのはラジャフ街道のフィールド北東部にある”原
石の岩”がある場所だった。

岩場のうえに近くに池があるため練習場所にはもってこいのところ
だ。

コウモリやクモ型のモンスターもいるが狩りながら練習出来る。人
気が少ないので剣の動きを練習するにも丁度いい。

俺は街道をネズミやクモ型のモンスターを片手間で狩りながら歩
くと途中で北東に道をそれ、人目の無いところでフェザームーブを使
って高速移動して原石の岩を目指した。

原石の岩のある場所へ程なく到着した。近くには周囲1kmほどの
池がある。

原石の岩は初心者クエストに登場する場所で、この岩の一部をラジヤフへ持って帰ることでクリアできたと思う。

そのため、クエストの後はめったに來ない場所の一つだ。

岩場は高さ10m幅25m程度の大きさがあり、岩の色は主に薄い灰色で、花崗岩が風化したものに似ているようだ。

魔法を失敗しても他に影響するような環境ではないため、メイジ見習いの俺には安心だ。

ただし、コウモリ型のモンスターのスモールバットが2匹いたのでプロボで引き寄せた後、両手剣のブラックファルクスで両方とも袈裟切りにした。

邪魔者が消えたところで<ファイア>を練習することにする。

まずはステータスの250MPのうち2MPを使うイメージで岩の表面を左手で指差し、高さ15cm程度の火を思い浮かべながら<ファイア>と唱える。

すると岩の表面に高さ15cm程度の赤い炎が現れた。様子を見ていると燃焼物が無いためか、5秒ほどで消えてしまう。

同じことを何度かやってみたが、やはり炎は5秒程度しか持たないようだ。まあ、薪の焚き付けには十分と言える。

次からは炎の大きさを変えてみる。とりあえず5cm〜50cmまでの炎をイメージして<ファイア>を使う。

同じMPなら炎の強さは小さいほうが熱量が多いようだ。大きい炎だと形が纏まらず安定しない。

ただし、小さければいいのかと言うとそうではなく、色が薄い黄色から青に近づいて強い炎となるが発火地点コントロールが難しくなった。

この辺は今後の訓練で安定させて行くしかない。あまり攻撃に使える訳でも無いのでほどほどでいいと思う。

それに使用MPが無制限ではないようで、20MP以上ではMPの量を増やしても炎の量に変化が無くなってしまいうようだ。

こんな調子で2時間ほど訓練を続けていると少し離れたところに、クモ型モンスターのスモールスパイダーが2匹現れた。

休憩代わりに軽く狩ることにするか。俺はその手にまた黒い両手剣を持った。

そして練習がてらにあることを思い付く。接近戦での〈ファイア〉詠唱だ。

通常なら近距離でしか使えない〈ファイア〉を戦闘で使おうとは思わないが、このLvのクモ相手ならダメージをことはないので実験してみたい。

15mほど離れた所に居る片方のモンスターへプロボをターゲットして発動すると、ゆっくり動いていたクモが少し早足でこちらに向かって来た。

モンスターが5mぐらいまで近づいたところで俺は<ファイア>をクモの目を狙って詠唱した。

これは、クモなどの昆虫系生物には目蓋が無いので直接炎の熱を受けるのではないかと考えてやってみたのだ。

30cmほどの炎を発生させることには成功したが、距離が近い為に連続して詠唱出来ない。

モンスターが一瞬怯んだので多少の足止めにはなったようだが、クモの目は複眼で8つもあるため全ての機能を止めることは出来なかったようだ。

体長1.5mのクモが怒り飛び掛るように襲ってくるが、右手に持った剣を前に出し両手で正面から突き刺した。

すると一撃でモンスターは死亡判定となり、この場から淡い光と共に消えてしまう。まあ、ザコ相手ならこれでもかなりのオーバークルだろうからな。

間を置かずにもう一匹のクモも攻撃を加えてくるが、横に避けながら足を2本同時に水平切りにする。

消えないところを見ると、これでは死亡判定は出ないらしい。部位破壊ではだめか。

バランスを崩して這い蹲るクモに俺は頭上から剣を突き刺して止めを刺す。

やはり<ファイア>は戦闘に向いていないようだ。対人戦なら使え

る様な気もするが、そんな酷いことをする予定は無いしな。

その後も同じ場所で1時間ほどくファイア>の訓練をし、俺はラジヤフに戻りながら移動途中で狩りをすることにした。

またアイリーンにお土産を持って行くか。ラジヤフラットを両断しながら俺は宿へ肉を持って帰ることを考えていた。

あ、それとステイタスを見て分かったことが一つ。今まで何も表示が無かった称号に”見習いメイジ”と表示がある。

この世界ではゲームの様に称号は売ってないみたいだし。自分で表示させた覚えも無い。

初級魔法を覚えたので”見習いメイジ”に認定されたようだ。だれに認定されたんだろう？イシター神かな？

<補足>

プロボ：ソルジャーのスキル、ポロヴォーグの略称。一定のヘイトをモンスターへ与えて注意を引ききターゲットとなる。10〜20m離れたモンスターにも有効。

ヘイト：モンスターが攻撃を受けた時に認識する負荷。パーティでは主にソルジャーやスカウト系の前衛職がヘイトを受けて後衛職であるメイジやドルイド系に攻撃が及ばないよう戦うのが基本。

14 見習いメイジ（後書き）

誤字、脱字、誤り、勘違い等は適宜修正したいと思います。

魔法の設定は考え付くままなので、そのうち変更あるかもです。

15 ファイヤーボール（前書き）

WWW説明ばかりで進まない。最後はあとで編集しようかな…。

15 ファイヤーボール

魔法スキルの取得は予想以上に上手くいつている。

<ファイア>は1日である程度コントロール出来たといっている。

初歩の魔法だからという事もあるし、魔力量のコントロールとイメージが容易だったのが大きい。

この世界の人は自分や他人のステータスを見ることが出来ないようだ。

そのために魔法を使う場合も魔力量と発動させる魔法のイメージを合致させるのが難しいのではないだろうか？

俺の場合はステータスでMPが確認出来るので、そのうちMPを使ってこんな魔法を発動させるというイメージが容易に出来るのだ。

これは熟練のメイジが多くの経験でやっと掴むことが出来る感覚なのかもしれない。

訓練を終えてラジャフに帰ると、俺は真つ直ぐ書店屋のメリヤ婆のところへ行き水属性の魔法<ウォーター>の魔導書を購入することにした。

「おや、今日は何の用だい？聞きたいことでもあるのかい？」

「＜ファイア＞を使えるようになったから＜ウォーター＞の魔導書
を売ってくれ」

「そんなに早くまともに使えるはず無いだろう。からかつてのか
い？」

＜ファイア＞が使えることをメリヤ婆は信じていないようだ。

「そう言っても使えるものは使えるんだ。試してもらってもいいが」

「それなら店の裏やっておくれ。本当だったら＜ウォーター＞の魔
導書売るよ」

二人は店番を剣技スキル担当の年配の男に任せると店の裏庭へ行っ
た。

俺は＜ファイア＞を庭にあつた枯れ枝を何本か重ね、それに向かっ
て発動させた。すると枯れ枝は赤い炎で包まれ、あっという間に燃
え尽きる。

「こんなに早く＜ファイア＞をものにするだなんて、やっぱりメイ
ジの方が向いてるんじゃないかい？ここまで出来るのに普通は1ヶ
月は掛かるんだよ！」

まあ、俺は元々この世界では規格外だから勘弁してもらいたい。テ
ンプレだろうから俺のせいじゃないよね…。

「火属性の剣技スキルをいくつか使えるから相性がいんだろっ。
＜ファイア＞は特別じゃないか？」

そんな風に誤魔化して<ウォーター>の魔導書を購入することに成功した俺は、その日の夜にルーンを身体に受け入れた。

2回目だった為か、<ファイア>より副作用の頭痛が少なかったのはありがたかった。

次の日にはまたラジャフ街道の原石の岩のところで<ウォーター>の練習をした。

<ウォーター>は主に球形の水を空气中に発生させる魔法で、旅やダンジョンで重宝するものだ。

使用MPは<ファイア>と同じ2MPで、洗面用の桶1つ分ほどの水球を発生させることが出来る。

練習してみるとMPの量に比例して水量が増えていくのが分かるが、<ファイア>と同様限界があった。

ある程度工夫してみたが、使用方法に大きな変化はなかったので練習を早めに切り上げてラジャフへ戻る。

こんな調子で1日目は<ファイア>、2日目は<ウォーター>を覚えたが、次は2日間空けて5日目に氷塊を発生させる水属性の魔法<アイス>を覚えた。

「5日で<アイス>かい。ガッツ、もう何があっても驚かないよ」

メリヤ婆も呆れながら言っていた。驚きすぎると命に係わりそうだからそれがいいよ婆さん。

そして、やっと8日目に念願の<ファイヤーボール>の魔導書を取得することになった。

<ファイヤーボール>は火属性の純粋な攻撃魔法で、灼熱の弾を作り出し、対象へ放つ弾道魔法だ。

最低使用MPは8で、ゲームなら魔導書を購入しなくても初期から取得している魔法だったが、この世界では初級とは言え魔法初心者へいきなり攻撃魔法を覚えさせることはしないようだ。

普通<ファイア>、<ウォーター>、<アイス>の三つをまともに使えるようになるには3ヶ月は掛かるそうだ。才能のあるメイジでも1ヶ月は掛かるらしい。

<ファイヤーボール>の魔導書を1銀で購入した俺は、早速その夜にルーンを身体に取り込んだ。

副作用でやつぱり頭は痛かったが、4回目でだいぶ耐性が出てきたのか酷くはならなかった。

いつもと同じ街道の原石の岩で練習をすることにしたが、本格的な

攻撃魔法とあってワクワク感がある。

訓練場所に到着すると、あたりにウロウロしていたクモさん2匹を剣で駆除して場所を確保する。

そして、10m程度離れた目標となる岩に向け、左足を前に出した半身から左腕を真っ直ぐ伸ばして指を差し詠唱する。

「<ファイヤーボール>」

消費MPは最小の8。暴発は無いだろうがどうなるか分からないしな。すると、指先に直径30cmほどの火炎の球が発生し、ロケット花火と同じぐらいのスピードで約10m先の目標の岩へ向かっていった。

岩に当たった火炎弾は、大きく爆ぜる様な音を残して消える。なかなかの迫力と威力だ。

その後は、MPの量を調節して<ファイヤーボール>を岩場に向けて発するが、実験の結果はこうだ。

まず、MPは32までが使用限界のようだ。それ以上は火炎弾の威力が変わらなかった。

16MPぐらいまではMPの量に比例して火炎弾や威力が大きくなったり、射程距離が長くなったりしたが、それ以上になると問題が発生した。

それは、火炎弾のキャストタイム（魔法を発動するまでに掛かる時間）が長いのだ。8〜16MPまでだと2秒ぐらいだったものが、24MPで4秒、36MPだと6秒掛かってしまう。

これでは詠唱者が無防備になる時間が長すぎて危険なため、24MP以上の魔法はソロの接近戦や複数相手の戦闘にはとても使えそうに無いだろう。

なお、攻撃魔法であるくファイヤーボール>はかなり確実に目標へ火炎弾を当てることができる。

訓練中に現れたモンスターにも狙ってみたが、動く目標に対しても同様な。

その理由は、詠唱者がくファイヤーボール>を放った後も火炎弾が目標に当たるまで指示していれば追尾して攻撃するからだ。

火炎弾は目標に当たった感触こそ無いが、指先が魔力でくファイヤーボール>の火炎弾と繋がっている感覚がある。

また、指示しなければキャンセル扱いとなり直進するだけで、適当な距離で魔力が尽きて消滅してしまう。思ったよりは安全な攻撃魔法だ。

ただし、途中でキャンセルしても攻撃魔法はクールタイム（次の魔法を発動させるまでの時間）の設定があるので連射は出来ない。

それ以上に問題は、この魔法の威力かもしれない。8MP消費では50〜60程度のダメージしか与えられないのだ。

ラジャフ街道なら一撃でモンスターを倒せるのだが、二桁以上のLVを持つモンスターにはあまり効果が無いだろう。

プロボ代わりに使うにしてもプロボの最低MPは5なのでコストパフォーマンスが悪い。

このため戦闘に魔法を使うなら何とか早めに上位魔法を習得する必要があるそうだと感じた。

日が落ちてきた為訓練も終わりにしようとした時、<ファイア>の魔法から思いついた<ファイヤーボール>の発動方法をやってみることにした。

<ファイア>では、炎を小さくすれば同じ魔法量でも強い火力を生ずることが出来た。これを<ファイヤーボール>で試してみるのだ。

まず、岩盤に向かって<ファイヤーボール>の火炎弾を小さく強い炎となる様にイメージして発動する。

すると火炎弾は5cm程度の青白い火球となり岩盤へ向かって飛んでいった。

結果としては予想以上だった。すばらしいのは火炎弾の貫通力だ。

通常の<ファイヤーボール>は攻撃対象の表面にある程度の打撃を与えながら炎で追加ダメージを与えるのだが改良版は違った。

青白い小さな火炎弾は岩盤に強い衝撃を与えてめり込み、岩盤の中で爆発したのだ。恐らく防御力の弱いモンスターなら貫通してしまうほどの威力だ。

貫通しない場合は想像するのが恐ろしいところだが、モンスターの体内で火炎弾が爆発するのではないだろうか？

これならばMP8の<改良版ファイヤーボール>でもLv20程度のモンスターまでは十分使える魔法になると思う。

MP16で使用するれば威力だけでなく<ファイヤーボール>の上位魔法<ファイヤーボール?>に匹敵するのではないか。

ただし、火炎弾が小さいためこれをコントロールして動く対象に当てるのは難しいだろう。これは十分な訓練が必要だ。

そうだとでも<ファイヤーボール>が使える魔法となる目途が立った俺は、明日からの訓練をどの様にするかを考えて楽しんでいた。

15 ファイヤーボール（後書き）

誤字、脱字、誤り、勘違い等は適宜修正したいと思います。

16 黒のオペリスク

<ファイヤーボール>の習得に成功したものの、急速な魔法の習得は目立ちすぎると感じた俺は新たな魔導書の購入を1週間後することにした。

早くて2ヶ月掛かるものを3日で済ました上、<ファイヤーボール>にいたっては単体で2ヶ月掛かるものさえ1日で終えてしまった。

この辺のチート具合はテンプレだと思うが、またメリヤ婆あたりに追求されると面倒なので、今後は多少調整する必要があるかもしれない。

次の魔法を習得するまで、俺は魔法スキルの向上と共に剣技スキルなどと組み合わせた戦闘スタイルを創って行く必要性を感じていた。

実はこれまでこの世界では剣技スキルを使っていないのだ。

俺の主戦剣技スキルはソルジャー（戦士）の基本スキルの一つである<クラッシュスマイト>（以降<クラスマ>に省略）なのだが、このスキルを使うのに不安があったからだ。

この技は土属性のスキルで、両手剣・両手斧を装備時に高くジャンプし、上から敵をたたきつける攻撃スキルだ。若干の気絶効果もある。

一見簡単そうだが動きに難しいところがある。空中で前転しながら武器で相手を叩き切るのだ。

俺は体操部でもなかったので空中で前転なんて出来ないし、ましてや重量のある両手剣を持ってやるのは無理がありすぎると感じていた。

それ以前に普通に剣を振り回すことさえぎこちなかったのだから、こんな大技を使えるとは到底思えなかった。

あれほど身体能力が高い原作のガッツですら”狂戦士の甲冑”を装備した状態でなければそんな動きは出来なかったはずだ。（でも、装備してやつちやうところが凄いよね！）

そこで、<クラスマ>は今後ゆつくり挑戦することにし、比較的行しやすい剣技スキルをいくつか試すことにした。

まず一つ目は<ヒートボディ>だ。このスキルは火属性で、熱気を体にまとい体当たり攻撃をすることで火属性のダメージを与え、少しの間気絶させることができる。

気絶効果により相手の攻撃を抑え、さらにパーティー戦ではターゲットを固定することが出来るためソロでもパーティでも重宝する有効なスキルだ。

これは<クラスマ>との併用により気絶効果を長くすることで、より有効に使える良スキルと言っていいだろう。

その他にも、戦士ソルジャーが使用できるステータス強化系のスキルである<シールド>や<スピード>、<ガッツ>を試すことにする。

ちなみに、<ガッツ>は名前と同じなのだがベルセルクとは関係が無いと思われる。効果は、火のオーラをまとい体中の筋力を増幅さ

せ、攻撃力を上昇させるというものだ。

もしも関係があるとすれば、ガッツポーズの”ガッツ”の方ではないかと思ったりする。

こうして1週間は剣技スキルを主に訓練することとしたが、スキルの威力を考えるとこれまで戦っていたラジャフ街道のモンスターではLvが低いため一撃で倒してい練習にならない。

このため訓練の場所をもう少しLvの高いモンスターが生息する他のフィールドとすることにした。その場所は”黒のオベリスク”通称”黒オベ”だ。

黒のオベリスクはラジャフ村から直接行くことが出来るため勝手がいいフィールドだ。モンスターのLvは15〜18あるので<ヒートボディ>一撃で倒れることはないだろう。

遠距離攻撃の<ファイヤーボール>と近距離攻撃の<ヒートボディ>の連続攻撃も練習したいので、それに耐えてもらわなければ困るのだ。

そこで俺はラジャフの北側にある黒オベの入口へ向かう事にした。

黒オベに行くためには橋を渡るのだが、その入口の両側には甲冑を装備して槍を持った二人の衛兵が立っており、その片方の30歳台の衛兵が話しかけてきた。

「おい、お前は冒険者か？」

「そうだ。最近ラジャフに来たガッツだ」

「そうか。ラクター隊長が噂をしていたガッツだったのか。私は衛兵のロデューだ。黒オベに行くのか？」

「そうだが、何か用か？」

「ああ、頼みがあるので少し話を聞いて欲しい。元々このラジャフ村は、北に広がる森で採れる木の実や材木をバビリムに売ることでは生計を立てていたんだ。けど、最近は塔の復活のせいかえらく毒蛇が増えて困っているんだよ…」

「ラジャフ街道でもモンスターが活発化していたな」

「そうなんだ。俺たちもヒマを見て、オベリスクスネークを駆除はしてるんだがどうにも追いつかなくてな。もしオベリスクの方に行くなら、手伝ってくれると助かるんだが」

ゲームであったオベリスクスネーク狩猟クエだな。このモンスターは体長2m弱のヘビだ。報酬は素材だったか？

「いいぜ。ただし、ついでに狩るだけだぞ」

「手伝ってくれるのか？ありがたい。結構多くて困っていたんだよ。駆除の証拠に蛇の頭を広場に面した衛兵詰所まで持ってきてくれたら、1匹あたり10銅の報酬を渡すよ」

「分かった。駆除したらそこまで持つて行けばいいんだな」

「頼む。腕は立つようだが相手は毒蛇だから注意してくれ」

「解毒薬もあるし大丈夫だ。またな」

ここでの狩猟報酬は金銭だったようだ。換金の面倒が無いし助かるゲームだと一定量が無いと報酬が受け取れないのと違ってフレキシブルなやり方で助かる。

こうしてLv16オベリスクスネーク狩猟クエを訓練のついでに受けた俺は、橋を渡って黒オベのフィールドへ入った。

<補足>

狂戦士の甲冑：ベルセルクの原作でガッツが装備する呪いの甲冑。
ドローフ 鉱精が製作した呪いの甲冑。着用した者の深層に眠っていた怨念を引きずり出して激情を起こさせ、その怒りから全身の痛覚を麻痺させて肉体の持つ力を限界まで引き出し、使徒を一方的に殺戮するほどの超人的な力を発揮させる。その反面着用者の心身にはとてつもない負荷が襲いかかり、肉体は著しく損傷する。

<シールド>：光属性。自分の精神を集中し気をコントロールする事で一定時間自分の防御力をアップさせるスキル。

<スピード>：光属性。光のオーラをまとい、体を軽くすることで、攻撃間隔を早めるスキル。

黒のオベリスク：通称「黒オベ」。地名の由来は、フィールド中部南西にある石碑で、神話のドルアーガ戦役に勝利したイシターを讃える賛辞が刻まれた石碑であり、黒曜石で出来ている。誰によって建立されたものか不明だが遙か神話の時代から、この地に建つとされている。

16 黒のオペリスク（後書き）

誤字、脱字、誤り、勘違い等は適宜修正したいと思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4525y/>

ドルアーガの冒険

2012年1月8日21時52分発行